幻城記　第二話

福元　希高

第二話　下天の夢　安土城

天正元年、二百四十年続いた室町幕府が滅亡した。

最後の将軍となった十五代足利義昭は、己を差し置いて全ての幕府の執政を専横する織田信長に対し、不満を抱いていた。武力を持たぬ身なれば、後背より策謀を巡らし、信長の専断に反発する諸大名や一向宗の総本山石山本願寺の光佐顕如に親書をたびたび送り、反織田信長包囲網を敷こうと企てた。

義昭とて初めのうちは、自分を征夷大将軍に担ぎ上げてくれた最大功労者の信長に対し、〝武勇天下第一〟とか〝御(おん)父織田信長殿〟などと持ち上げた感謝状を贈っていた。

信長が京から領国に引き上げる時は、義昭は涙を流して見送っていたのだ。

だがその蜜月も長くは続かなかった。

新将軍になり、嬉しさではしゃいでいた義昭は、将軍としての自分と信長の地位が、主従である筈が逆転している事に気付き、不満を抱き始めた。

義昭と信長の関係が険悪化するきっかけは、元亀元年に信長が義

昭に突き付けた、五ヶ条からなる〝殿中御掟書〟であった。

義昭のはしゃぎ過ぎを諌める内容で、余計な事はせず、この信長に全てを任すべし、口出し無用という事であった。

「無礼なり信長、余は征夷大将軍なるぞ。一体何様の積もりじゃ、今に見ておれ。余を甘く見るな」

義昭は激怒し、これより両者の間に亀裂が生じた。

義昭の諸大名への裏工作が始まった。反織田信長と言える強力大名は、主に甲斐武田信玄、安芸毛利輝元、越後上杉謙信らであった。

これらの戦国大名に義昭は、兵を挙げて上洛し自分を補佐するようにと、いろいろ書き綴って密書として送り続けた。

元亀十三年、京方面の細作から送られる義昭の情報を受けて、信長は業を煮やし、義昭に〝織田信長朱印条書〟を送り付けた。

これは異見十七ヶ条とも言われたものである。天下の事はこの信長に任せた以上、義昭公の意見は御無用。つまり余計な事はするなという内容であった。

しかもこの十七ヶ条の意見書には、一つ一つ義昭の失政を論(あげつら)い、これからは大人しくしているようにということが綿々と綴られていた。

「おのれ信長、越権である。一向宗よ信長に反旗を掲げよ、信玄よ立て、謙信よ上洛して余を助けよ」

益々怒りを増す義昭は、言う事を聞くどころか、今まで以上の反信長包囲網作戦の裏工作を進めていった。

この頃信長は盟友の三河徳川家康との連合軍で、浅井長政、朝倉義景の同盟軍と近江姉川で激突。世に言う姉川の合戦で同盟軍を撃破、勢いに乗って浅井、朝倉を追い詰めていた。

だが義昭は、浅井、朝倉軍が姉川の合戦で敗退しても、反信長の各大名、各宗門に密書を送り続けた。これに京の比叡山延暦寺が応えたのである。

追い詰められた浅井、朝倉同盟軍が、比叡山に逃げ込んで匿(かくま)われたのが発端であった。

比叡山が浅井長政、朝倉義景に加担したと見た信長は、保護するなら比叡山を総攻撃すると勧告した。比叡山側はこれを拒否。再三の勧告を聞かず抵抗する比叡山側に、信長は焼き討ちの指令を発した。軍議の中から、

「あいや、お館様それはなりませぬ」

手を上げ止めようとした武将がいた。明智光秀であった。

「光秀、止め立て無用」

信長が決め付けた。

「いや、お館様こればかりはなりませぬ。何卒お止まり下さりませ、比叡山は古来より学問の修行の場、天台宗の総本山にございます。また天子様のご縁深き名刹を焼き、高僧方が死すれば、お館様の盛名が未来永劫悪名となりまする。ここは何卒思い止まって下さりますよう、光秀伏してお願い致します」

止(とど)めようとする光秀の目が一瞬眩んだ。

信長が手に持っていた軍扇で光秀の眉間を打ったのである。額が割れ、鮮血で顔を朱に染めた光秀に、信長が、

「黙れ光秀、主命に背くか。天下の名山とて何畏れるものぞ。日頃から淫欲に耽り、魚、鳥肉を喰らい、蓄財に現(うつつ)を抜かす生臭坊主共、構わん、全て焼き尽くせ」

信長の怒りは収まらなかった。光秀は流れ落ちる血を拭いながら、このお方は仏罰を畏れぬのか、と呟き、後は放心状態であった。

比叡山延暦寺は、信長軍の総攻撃で全山と言っていいほど丸焼けにされた。根本中堂を始め、千にも及ぶ堂塔などを焼き払い、貴重な文化財、古文書も灰燼に帰し、名僧、高僧、碩学の僧たちも容赦

なく斬首。降伏する僧兵も首を刎ねられ、山門下の俗人、婦女子に至るまで夥しい数の人々が誅殺された。

堂塔、霊仏、経文、全てが焼かれ、黒煙が天高く上がり阿鼻叫喚の地獄絵と化した。

犠牲者は三千人を超す大虐殺であった。

これよりのち、織田信長の事を世間では魔王と呼んで恐れられるようになった。

これと前後して、今度は義昭の誘いに応じて一向宗総本山、大坂石山本願寺光佐顕如が反旗を掲げ、反信長連合を呼び掛けた。

石山合戦の始まりであった。

光佐顕如の親書を受けて、とうとう甲斐武田信玄が挙兵し上洛を目指した。織徳連合軍は遠江三方ヶ原で武田軍を迎え撃った。結果は惨敗。信長軍は逃げ散り、徳川家康は浜松城に逃げ帰った。

そこで事変が起きた。大将武田信玄が倒れ、軍を退いて領国甲斐に戻り、やがて病死したのであった。

信長の強運は過ぐる年、駿河今川義元に遠江桶狭間で逆落としの奇襲を掛け、首級を挙げて以来続いていたのだ。

石山本願寺との合戦は、以前にも増して続いていた。

「あの葱公方め」

信長は家臣に渾名を付けて呼ぶ癖があり、近頃では将軍義昭に対しても葱公方とか葱坊主とか言って罵っていた。

「もう我慢がならぬ。あやつは許せん」

堪忍袋の緒を切った信長は、義昭の居る二条御所を取り囲み、義昭を二条御所から追放してしまった。その後、義昭は山城槙島城に籠り、反撃するが、衆寡敵せず投降、身柄は河内若江城に幽閉。やがて備後鞆の浦に流されたのであった。

ここに二百四十年続いた室町幕府は事実上滅亡したのである。

この後、信長はとうとう宿敵朝倉義景を越前一乗谷にて滅ぼし、続いて自分を裏切った義弟浅井長政とその父久政を近江小谷城に攻め入り自害させた。

天正二年、織田信長の居城、岐阜城にて、新年慶賀の宴が賑々しく催された。

織田家累代の重臣たち、新しく仕官し功あって取り立てられた武将たち、はたまた信長の軍門に下り臣従を誓った諸大名たちが、綺羅星の如く控え、酒宴は酣(たけなわ)であった。

下戸である信長は、酒宴の席での形式上の酒でさえも全く口にしないのが常であった。だが、この日ばかりは勝利の後の祝宴という事で、珍しくほんの少々屠蘇を口にした。

ぼうっと顔を朱に染めた信長が立ち上がって、上機嫌な声音で、

「座興である。一指し舞おうぞ」

おお、と歓声が上がり、座を正した列席の衆が静まり、一同信長を見た。

人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢まぼろしのごとくなり
ひとたび生を受け、滅せぬもののあるべきか

幸若舞、声明平家物語、平敦盛の一節である。

静々と謡い出し、やがて勇壮に謡いながら舞う信長に、一同は真剣に見惚れていた。一節の中の下天とは、天上界の下位の支配、四王天のこと。この下天の一日が人間界の五十年に当たる。人間は五十年生を受けても下天の内の一昼夜、夢まぼろしの如くなり。この虚無感が信長は気に入って、時に舞うのであった。

「お見事なる謡と舞、眼福至極、一同耳目の保養をさせていただきました」

老臣林佐渡守通勝が追従の賛辞を述べた。

信長は厳しい顔に戻り、
「次なるも座興である。例の物を持て」
小姓の者が大きな茶碗のようなものを三つ、公卿という盆に載せて中央に置いた。
「や、これは」
老臣佐久間右衛門信盛が声を上げ、繁々と見つめた。
「これはの、先年滅ぼした浅井長政、久政、朝倉義景めの髑髏よ。箔濃にして大盃にしてくれたわ」
一同、ぎょっとして息を呑み、身を硬くした。並み居る戦国の武将たちも、これには声も出ず、唖然としていた。
箔濃とは漆を塗り、金箔や銀箔で覆った物のこと。いかに敵将とはいえ、挙げた首級のされこうべを箔濃にして盃として呑むとは、異常な精神の持主でないとできぬ所業であった。
静まり返った大広間に、信長は不機嫌な面持ちで、
「誰ぞ、これを持って酒を呑まぬか」
と叫んだ。
一同は下を向いていた。
「佐渡、呑まぬか」

「いや、それがしは、お許しを」
林通勝が、信長の目を避けて頭を下げた。
「信盛如何に」
「あいや、こればかりは平にお許しを」
佐久間信盛も顔色を変えて許しを乞うた。
「ふん、不甲斐ない奴め。誰かおらぬか」
座は白け切って、しんと静まり返っている。
「畏れながら」
明智光秀が前に進み出た。
「おお光秀、呑むか」
「お館様、本日の慶賀の宴、そろそろ終わりとされては如何でしょう。皆酒と料理に満足しております。お館様の御威光に一同ひれ伏し、より一層の忠誠を誓いますれば」
「黙れ光秀。貴様、分をわきまえよ。新参の貴様が終宴の口上を述べる立場か」
「ご無礼仕りました。お許し下さりませ」
「この大盃にて酒を呑むというなら許してつかわす」
しばし無言で考えた光秀は、意を決して、

「されば身分違えど、この光秀お受け仕ります」
中央に進み出て、金色に輝く髑髏を捧げ持ち、注がれる酒を受け、押し頂き、胸中呟いた。
――このいずれかは嘗て我が身を寄せた主君、朝倉義景様。お懐かしや、明智十兵衛にござります。勝敗は時の運。何卒お心安らかに、成仏されますように。南無。
目を閉じ一気に呑み干した。
「でかした、光秀、本日慶賀の宴、これにて終わる」
頭を下げ、座に戻った光秀の目に、涙が光った。
その光秀の前に、信長から小姓の手に渡された一振りの小太刀が捧げ置かれた。
「褒美に取らす。家宝に致せ」
くるりと背を向け、信長は座を去っていった。
信長の後ろ姿を見ながら、光秀は胸中、
――何と酷いお方だ、これが人のすることか。
と叫んでいた。
将軍義昭が流され、浅井氏、朝倉氏が滅んだ後、朝廷から信長の

もとに内々の打診があった。いずれ天下平定の後、太政大臣に叙し、関白となり天下を治めよということであった。

信長はこれを固く辞退した。

――今この身は平氏を名乗っているゆえ、太政大臣なのであろう。将軍は源氏でなくては受けられぬ習わし。これは仕方なしとしても、位人臣を極める太政大臣とは公家の棟梁。そんなものをこのわしが望むとでも思っているのか。この国を治めるには、武力の一番強き者でなくてはならぬ。わしが掲げる天下布武。武力を以って治めねば国は形を成さぬ。帝は民の崇める存在であり、国を治める者が帝を敬い守護し奉る。帝を上位に置いて武の王が国を司る。将軍や関白などわしは望まぬ。世間がわしを魔王と呼ぶならそれも良し。民が恐れ従うわしは、武の大王となりてこの国を平定してみしょうぞ。

信長は自分の代わりに家臣の官位叙任を朝廷に奏請した。これには訳があった、

今後、信長の軍門に下り臣従してくる諸大名が増えてこよう。それらは信長麾下の武将の組下に入れられる。しかし官位を持つ諸大名が何も持たぬ一介の武将の下に付くには何かと不都合が生じる。信長直属の将たちにも、それとした身分が必要なのであった。

朝廷はこれを聞き入れ、信長の家臣たちにはそれぞれ姓名、官名、位が、恙(つつが)なく叙任された。

柴田勝家には官名、修理亮。滝川一益も官名、左近将監。羽柴秀吉は官名、筑前守。丹羽長秀には姓名、惟住、官名、越前守を与えられたが、丹羽長秀は官名を辞退、姓名のみを受けた。そして明智光秀は姓名、惟任、官名、日向守、位、従五位下と、姓官位の三つを叙された。これは新参者の光秀にとっては破格の出世であった。

信長から、

「惟任光秀よ。爾今、其の方に近江半分を授ける。居城は坂本にせよ。一層励めよ」

光秀は身体を打ち震わして喜び、信長に平伏した。

大名となった惟任明智日向守光秀は、ようやく戦場から引き揚げ、織田信長から拝領した近江坂本に入城した。

光秀の家臣、明智左馬助秀満は、主人光秀に先んじて坂本城に入り、城内整備の後、正門にて主君を出迎えた。この時光秀の妻子はまだ岐阜に置いてきたままであった。

「お待ちしておりました。ご無事のご到着、祝着にござります」

「出迎え大儀。みな疲れておるが大事無い」
「奥方様にも、早くご入城される為に工事を急いでおります」
「熙子や子供たち、母御も急ぐことはあるまい。先ずは家臣の者たちの配備、住居など急がねば」
今や光秀は、近江坂本城主、禄高五万石、信長より付けられた兵士は八千人。これは三十万石に相当する兵力であった。これだけ増えた家臣、兵士を賄える扶持、住居などまだまだ不充分だったのである。
光秀は居室で疲れた身体を横たえ、じっと目を閉じ、もの思いに耽った。
――信長様に随臣してからこの方、戦に明け暮れ命落としそうになること幾たび、よくぞここまで生き延びてきた。この強運、神仏の御加護であろうか。いや、信長様の余りに酷い戦の仕置き、それを命ぜられるままに従ったわしだ、御加護があるはずが無い、今にきっと何か起きるのでは……
「お館様、左馬助にござります」
と声が聞こえた。
半身起こし、気を取り直して光秀が声を掛けた。

「入れ」

受けて左馬助秀満が入室してきた。

明智家の縁に繋がるこの秀満は、光秀が美濃斉藤道三の死で斉藤家とは絶縁となり、越前に流れる時も供として連れていった、光秀の股肱の臣であった。

一説には光秀の従兄弟とも言われている。

「お疲れでございましょう」

「構わぬ、城の修復のことであろう。急がねばなるまいの」

「はい、壕は水引き悪く、土塁はあちこち崩れ、館の内も所々雨漏りが酷うござります」

元々この坂本城は、志賀、宇佐山城と言い、森可成が守っていた。だが、可成は戦死、落城した。しかし信長がこれを取り戻し、少し場所を移し修築した城であった。

「この近江の領内には、穴太衆と呼ばれる築城の石工職人の集落があると聞く」

「石工ですか」

秀満は首を傾げた。

「調べ上げてこれに召し出せ。穴太衆石工の若頭とは、その昔知り

合うた事がある。急げ」
「はは、では直ちに、御免」
左馬助秀満が下がっていった。

近江の国穴太村に住む石工集団、穴太(あのう)衆の頭、石切伝衛門と息子千四郎が、明智光秀の待つ坂本城にやって来たのは十日後のことであった。

光秀は石切父子を居館の書院に呼び、平伏している二人に声を掛けた。
「わしが新しき領主となりし明智光秀である。石切伝衛門、よう参った。此度はそなたたち穴太衆に頼みがあって来て貰った。大儀である」
「石切伝衛門にござります。新しきご領主様にお目通り叶い、恐悦至極にござります。またこれに控えし者」
「千四郎であろう、知っておる」
と光秀が笑顔で遮った。
「千四郎、面を上げよ。わしを憶えておるか」
「はい、和泉堺にてお目に掛かりました」

「そうだ、今井宗久殿の屋敷内にて出会ったの。懐かしいぞ」
「ご領主様には大層立身御出世、おめでとうございます」
「うむ、いろいろあったがの、今はこの通り織田信長公に仕えておる」
「松永弾正様も臣従されたと聞いております」
「知っておったか。それがの、松永弾正殿、一時謀反を起こし、許されて逼塞されておる。
また再び事を起こせば、其の方たち穴太衆が携わった多聞城はどうなるであろうか」
石切伝衛門と千四郎は無言で顔を伏せた。
「此度、近江片方を治める事に相成ったが、何せ話が急であった。其の方たちも見たであろう、この城はひどく荒れておる。そこで穴太衆の石工職人に、この城の修復を頼みたい」
「はい、仰せに従いまするが、我らにできる事は壕と土塁などの普請にござります」
「相分かった。水利、普請を穴太衆に任す。主要なるところ、堅固な石垣を巡らして貰うぞ」
「承りました」

伝衛門が厳しい顔で答え、平伏した。

石切伝衛門、千四郎父子が下がってから、光秀は岐阜に残している妻や子供たちに思いを馳せた。

正室熙子、若き頃、才色兼備を謳われた美女であったが、光秀に嫁して来る直前、疱瘡に罹(かか)ってしまった。父の妻木勘解由左衛門範熙は熙子の代わりに、やはり美人の妹の方を嫁がせようとしたが、光秀は、

「我が妻は熙子でござる。熙子こそ我が終生の妻にござる」

と言って婚礼を挙げた。

顔、身体に痘痕(あばた)の痕が残る熙子を、光秀は以前と変わらず愛情を持って接した。お陰で熙子は明るさを失わず、健気で慎ましく、一生懸命夫に尽くした。何よりも聡明なところが光秀にとって掛け替えのない最良の妻であった。光秀はその熙子をこよなく愛していた。

熙子との間に三人の娘と、その下に二人の男子も生まれた。だが光秀はいつも戦場にあって、子供たちと過ごす時は全く無く、妻熙子に育児を任せる儘であった。

――早く戦乱を終わらせねば、妻子の身の安全とて保障しかねる。

信長様は敵が多すぎる。あのご気性ゆえ、益々敵も増え続けるだろう。あの比叡山の死人の数、信長様は何も感じないのであろうか。信長様ご自身、和子様や姫様の父上でおわすのに。この先まだまだ信長様による殺生が続くであろう。

疲れた身体を横たえながら、光秀は眠れぬまま闇を見つめていた。

この年、織田信長は、伊勢長島の一向一揆討伐の号令を発し、総力を挙げて出陣した。

過ぐる年、伊勢長島の一向一揆は尾張小木江城を攻めて、信長の弟、信興を殺したのであった。浅井氏、朝倉氏を滅ぼした後で意気上がる信長勢も、伊勢長島の一向一揆だけは手こずっていた。

死を恐れぬ伊勢長島一向宗の必死の抵抗で、信長の兄、信広と、弟の秀成が討ち死にする程の大変な激戦となった。だが滝川一益の奮戦と紀伊、九鬼右馬充嘉隆率いる九鬼水軍が大活躍し、崩れ散る一向宗を総勢で押し出し、取り囲んで、老若男女全て二万人に及ぶ信者たちを焼殺したのであった。

時待たずして信長は、今度は朝倉氏亡き後、亡国と化した越前と加賀に再び出陣の布令（ふれ）を出した。

越前を制している一向一揆との全面戦争であった。信長は大軍を率いて近江から攻め入り、光秀も羽柴秀吉らと共に軍船で若狭から攻め込んでいった。

越前一向宗と、援兵として参戦していた加賀一向宗の両軍は総崩れになった。

各地で何千人と斬殺された一向宗は、追い詰められて山々に逃げ散った。

信長は容赦無かった。山野に潜む一向一揆衆を探し出し、これら全て老若男女を問わず首を刎ねた。

念仏を唱え、進めば浄土、退けば地獄と死を恐れず信長に抵抗した一向宗は、その数二万人、その殆んどが虐殺されたのである。

この一年の間に、信長は四万人に及ぶ一向宗門徒たちを、この世から消し去ってしまったのであった。

領国に引き揚げる光秀は心が晴れなかった。

――戦とはいえ、こうまで人を殺めねばならぬのか。あと二日待ってくれれば降伏すると言ってきた集団もあった。助命して従わせることは、これまでの乱世の仕来たりであるのに。

戦で疲れた兵団を率いて、光秀は近江坂本城に帰っていった。

悪しき事ばかりではなかった。

坂本城では正室熙子と子供たちが岐阜から移り、光秀の帰城を待っていた。

光秀に束の間の安息が訪れた。久し振りに見る妻の顔、控え目ながらてきぱき答える明るい声、次第に光秀は心が和んでいくのを感じた。

光秀は妻子を伴い城内を見て回り、子供たちを城外にも連れ出し、楽しく一緒に時を過ごした。

「お館様」

熙子は、夫が城主である事を心得、呼び方を変えていた。

「三人の娘、どうぞ良いご縁組を考えて下さりませ」

「もうそのような歳か、早いものよのう」

いつも側に居てやれぬ三人の娘は、明るくすくすくと育っていた。

「家臣の縁組は、主君信長様に届けねばなるまいが、その内に決めようぞ」

平和であることが如何に良いことか、これがいつまで続くのか、光秀は考えていた。

深夜、寝所で久方振りに熙子を抱いた光秀は、柔らかく透き通るような白い裸身の中に身を沈めていった。

平穏な日々は続かなかった。

織田信長は三河浜松城主、徳川家康との連合軍で、宿敵武田勝頼軍との最後の決着を付けるべく、甲斐に向け出陣した。ところが光秀は西方の侵略に備え、信長の居城岐阜城の守りを命ぜられた。そのため長篠の合戦には加わっていなかった。

両軍は長篠の西、設楽原にて激突、最強を誇っていた甲斐の騎馬軍団は信長の新しい武器、夥しい数の鉄砲の前に破れ去った。

これを機に武田軍は総崩れ、重臣武田信廉は重傷を負い、山県昌景、小幡信貞、馬場信春など、勇猛果敢な武田の猛将は、次々に討ち死にした。

戦国第一と恐れられた武田軍団は、この合戦後、力を失い衰退していったのであった。

再び坂本城に戻った光秀のもとに、信長の伝令が届いた。

上杉謙信上洛の報で松永弾正が再び謀反、急ぎ兵を整え岐阜に参陣せよ。

慌しく光秀は信長のもとに向かって出陣した。

事態は急変した。越後春日山城を出発した上杉謙信が倒れ、急死したのである。

戦国の奸雄、松永弾正の野望は、上杉謙信の死によって水泡に帰した。

多聞城を棄てた弾正は信貴山城に籠り、信長の特使として信貴山城に入った光秀の投降の説得も受け入れず、天下の大名物、平蜘蛛の茶釜に爆薬を仕掛け、天守閣と名付けた楼閣共々壮烈に爆死したのであった。

一方、穴太衆石切千四郎たちが精魂込めて築城に携わった多聞城、天を守る多聞閣も、信長の命により焼失したのであった。

天正四年、岐阜城に於いて織田信長は新しい決意を持って光秀を召し出した。

「明智光秀、お召しにより参上」

「参ったな惟任光秀、近う寄れ」

惟任と呼ぶ時は、信長は機嫌が良い証拠である。

「惟任よ、わしは新しき城を築く」

「おおこれは、めでたき事。して何処に」
「其の方の領国、近江」
光秀は顔を引き締め、次の言葉を待った。
「わしは那古野城で生まれ、清洲、小牧、この岐阜と移り住んだ。だが永住の城ではない。宿敵であった武田氏をあのように叩いた今、わしは新しき城と街を創り天下を治める」
「誠に、重ねてお祝い申し上げまする」
「琵琶湖である。あの大湖の入り江に突き出した安土山に、これまでに無い壮大なる城を築くのよ」
光秀は目を丸くした。
「これは驚きました。いや、祝着に存じまする」
「ついてはの、其の方の領地内に、築城普請の石工衆たちが住まいおると聞く」
「は、穴太衆と呼ばれる石工職人衆でござります」
「その穴太衆の棟梁を召し出せ。聞けば松永弾正めの多聞城、その石垣は全て穴太衆の仕事と聞く」
「仰せの通りにござります」
「よし、安土山の築城総奉行は丹羽長秀に命ずるが、其の方には領

国の者を引き連れ総力で長秀の助勢を申し付ける」

「承知仕りました」

光秀は平伏した。

近江穴太村では葬儀が行われていた。

穴太者と馬渕者たちを束ねる石工頭、石切伝衛門が亡くなったのである。

亡くなる数日前、伝衛門は最後に考案した石積みの新しい工夫〝算木積み〟を千四郎に伝授したのであった。

「千四郎、お前がこの先、工夫を重ね、わしの算木積みに新たに名を付けるがよい……よいか、石垣は百年、二百年後も残るものを心掛けよ……一将死して城残り、城落ちて石垣残る……精進せよ、工夫を怠るな……」

伝衛門は眠るが如く息を引き取った。

石切千四郎は葬儀の場で、これより自分が新しい穴太衆石工頭であると宣言した。

葬儀の後、千四郎のもとに明智光秀の使いが来た。織田信長公のお召しであると伝えられ、身が引き締まる思いで岐阜に向かったの

であった。

岐阜城、穴太衆石工頭石切千四郎は明智光秀に伴われて登城し、庭園内で織田信長に拝謁した。

万死の山を歩む魔王と恐れられる信長の前で、千四郎は身を硬くしていた。だが意外や、信長は笑顔で、極めて優しく千四郎に語り掛けた。

「穴太衆石切千四郎、大儀であるぞ。近う寄れ」

光秀に促され、信長の前にかしずいた。

「松永弾正の築城せし多聞城の天守閣、あれは昔、初めて上洛した時、大和、奈良の山中より眺めたことがある。美しい城であった。其の方らの手によると聞いた。見事な城構えなり」

格式よりも能力を重用する信長には、人を見抜く才覚があった。千四郎を一目見て、何か感じ取ったようである。

「時に千四郎、わしの手足となって、今一度城を築くのだ。琵琶湖のほとり、安土山より高層の天守閣が聳(そび)え立ち、大湖の水面に映り輝くであろう」

信長の目が光った。

「石切千四郎、これより石奉行補佐を命ずる。石狩りは其の方が指示を出せ。畿内一円、瀬戸内からも石船にて巨岩を運ばせるぞ。城の周りは全て石垣で囲む。総奉行は丹羽五郎左に任すが、普請、作事、装飾は全てわしが見て回る」

信長はさらに千四郎の側に顔を近づけ、

「千四郎よ、天下一の城下町ができるぞ。武士も商人も自由に出入りする賑やかな街になろうぞ。我に考えあり」

信長は上機嫌で光秀の方を向き、

「惟任光秀よ、安土山の新城が完成すれば、其の方の領国は手狭になろう。これより丹波を平定せよ。丹波一国、其の方の切り取り勝手である」

「はは、有り難き仕合せ」

「其の方の組下に、筒井順慶、細川藤孝を付ける。丹波を早う平らげよ」

「おお、これは身に余る光栄。拝命の段、身命に懸けて励みまする」

「それとのう惟任、其の方の娘三人、もうよい年頃であろう。わしが嫁ぎ先を決めてやるぞ。これは其の方が益々大きゅうなる事への、わしのはなむけである」

「は、これもありがたき君命なれば、謹んで従いまする」

この日の信長は、終始上機嫌であった。

織田信長は決断と実行の英傑であった。

信長の周旋で、あっという間に光秀の三人の娘の嫁ぎ先が決まった。

長女は荒木摂津守村重の子、新五郎村安の妻。次女は津田七兵衛信澄（信長の弟信行の子）の妻。三女（後の細川伽羅奢（がらしゃ））は細川兵部大輔藤孝の子、与一郎忠興の妻。

これぱかりではなかった。信長は光秀の次男、十次郎を筒井順慶の養子にするよう斡旋したのである。

荒木村重と細川藤孝は、義昭公の幕臣の頃からの古い知己であり、筒井順慶もお互い心の通う間柄、津田信澄は主君の血筋、文句の付けようのない信長の配慮であった。

――お館様にも、こんな血の通ったお考えがあるのか。

光秀は感激していた。

これより光秀は丹波平定の準備に掛かり、千四郎は地取り、縄張りの始まる琵琶湖の近く、安土山に向かった。

桜花の盛り、琵琶の大湖にその影を落とす安土山に来て、千四郎は今更ながら京の都が近い事に気が付いた。そして城を築くにこれほど適した地形は無かった。山裾に広がる平地は、新しき城下町を作り易く、城郭の資材その他の運搬も容易に進むように見えた。

――岐阜城は高過ぎるし、京からは離れ過ぎている。信長様はそれもご不満なのだろう。

天正四年、安土城の地取り、縄張りも終え、壕、石垣の普請が開始された。着手した頃は雑兵、農民、職人などが招集され、初めは二千人ほどであったが、やがて他国からも人足が集められ、総数一万人を超えるに至った。

千四郎は石狩りの責任を負い、あちこちを飛び回って巨岩、大石の情報を集めた。安土城の要、城門に備える巨大な鏡石は、千四郎の指揮で小豆島などの瀬戸内海からはるばる石船にて運ばれたのであった。

巨岩を割り、切り、削る作業は穴太衆の手によった。それらは次々に形作られ、運ばれていった。信長の家臣西尾小六郎が石奉行で、千四郎はその補佐役として畿内一円、瀬戸内全域より大石を運び、石垣はどんどん出来上がっていった。

穴太衆の手による石垣の石積み方は、打ち込み接(はぎ)や、切り込み接による大規模な工事が多く、野面積みと違って必要な石材は巨岩を割って切り出すのである。

特殊な鉄製の楔(くさび)を金鎚で打ち込み、深さ三寸程の穴を開ける。これを矢穴という。これを一列に同じく数ヶ所開け、そして割る。巨岩に走る罅(ひび)割れを目敏く見付けるのが、石工の技であった。

――それにしても信長様は不思議なお方だ。

千四郎の目に映る信長は、人間とは思えぬ途方も無い人であった。

織田信長は、安土に現れると毎日陣頭に立って城の普請を見て回った。

信長の周りにはいつも切支丹伴天連が二、三人付いていた。どうやら南蛮の築城術を伝授しているようであった。

特に山上の天守閣作事には、必ず付き従っていた。

信長は天主教の布教には寛大で、数年前にポルトガル宣教師ルイス・フロイスに布教を許可していたのだ。

信長は大工頭に当代一の岡部又衛門、絵師に狩野永徳、山楽親子を任命し、装飾は自ら一つ一つ丁寧に指示していた。

また石垣の勾配には特別気配りし、石垣の反らせる角度などを細

部に渡って千四郎に指示した。俗に言う武者返し、忍び返しである。

信長は合戦の度に、しょっちゅう安土から出陣して行った。戻って来ると涼しい顔をして、装飾に目を凝らし、あれこれ指示を出す。

これより大坂に出陣と出かけて行き、また戻っては普請指導に没頭している。

今度は丹波、やれ加賀、それ伊勢、忙しく出陣、また戻って来ては作事の指示。

合戦の度に何千人もの敵を殺しては安土に戻って来る。しかし信長の表情は爽やかで、何事も無かったかのように、楽しそうに居館の出来具合を眺めている。

千四郎の目には、信長が出陣する時の姿が、まるで鷹狩りに出るような気軽なものに映った。

――信長様は常人では無い。越前、加賀、伊勢長島では数万の人を殺したという。比叡山でも僧俗男女皆殺しと聞く。今この地におわす信長様と同一人物なのだろうか。

千四郎は深く考えた。

――やはりこのお方には魔性が棲みついているのだろう。

魔性であるかは別にして、信長は朝廷と公家衆に衝撃を与える事

をやってのけた。

かねてより叙位されていた右大臣と右大将を辞任し、官位を返上したのであった。

これには世間も驚いた。

朝廷の内でも、将軍職も関白の地位も拒否するこの魔王の如き大名が、いつか帝に成り代わり、異国の王位のような名乗りをするのではないかと恐れる者も現れた。

天正四年、安土城の居館が完成、信長が岐阜から移って来た。

まだ石山合戦は続いていた。

石山本願寺を救う為、安芸毛利輝元が軍船七百艘を揃えて大坂に来たり。織田水軍三百艘を撃破、石山本願寺に兵糧を運び込んで、本願寺勢は息を吹き返したのであった。

「毛利水軍やりおる。何か手立てを考えねば」

織田信長という天才武将は実に辛抱強く好機を待った。

戦に天賦の才を見せる信長は、九鬼嘉隆の水軍に命じて、数多くの大砲が積める大安宅船と呼ぶ大船を造らせた。その大船の周りに幅七間、長さ十二間余の鉄を貼らせたのである。この巨船の造船術

も信長が切支丹伴天連から聞き覚えたものであった。

またしても大坂の海上に現れた毛利水軍を、九鬼水軍はこの大安宅船にて迎え撃った。大砲を敵船に撃ち込み、また敵の放つ銃弾を防ぎ、敵軍船を海に沈め大勝利を得たのであった。

天正八年、十年に及ぶ石山本願寺との激しい戦も、朝廷の斡旋によって和睦となった。これにより、光佐顕如は石山本願寺を引き払い、紀伊雑賀へ落ちていった。

信長の命により、この石山本願寺は全て焼き払われてしまった。

この間安土城は完成に近づいていた。

安土山を総構えとし、本丸、二の丸、三の丸、これらは全て石垣によって囲まれた。聳え立つ五層七重の天守閣。内外の装飾は文化の粋が凝らされ、居館と同じくこの天守閣の八角形の四層は、信長が起居できるように造られていた。

安土城は天才信長が一人で考え出した殿舎であった。城のすぐ側まで琵琶湖が迫り、城の真下から軍船が発着できるように造られていた。湖が城の外壁と壕を兼ねており、その優雅な姿は湖水に映し出され、壮麗に浮かぶ軍艦の如く、まさしく天下人に相応しい城で

あった。

信長の全ての家臣たちが、入れ替わり城を見物した。その中に丹波から呼ばれた光秀の姿があった。

――見事なる城である。信長様は築城にも天賦の才を発揮される。わしにはとてもこのような美しき城は築けぬ。

光秀は感嘆した。

――いつの日かこのわしにも、このような城が。いやいやわしには必要ない大城である。

一人苦笑しながら、光秀は城の造りを見て回った。この後足早に丹波の戦場に戻って行った。

安土の城下を発展させる為に信長は〝安土山下町中十三ヶ条〟を出し、中仙道を往来する者全て安土城下を通るべしと定めた。そして楽市楽座を広めた。栄えさせるには活気が無くてはならぬ。そう考えた信長は、城下で各国から召し出した力自慢の相撲大会、馬揃え、船祭りなどを催した。また城下の民に安土城を開放、くまなく見せて見物料一人百文を取り、集めた金銭を民衆に分け与えた。やがて全国から商人たちも集まり、安土城下は活況を呈していった。

普請、土木の後始末も残っていて、千四郎はまだ安土城下に居た。

――信長様は鬼であり、天才である。嘗ての松永弾正様も築城の天才であったが、信長様はまたそれを大きく上回る魔性の天才である。

今度こそ、この天守閣が後世にまで残って欲しいと、千四郎は心の底から願っていた。

なぜなら父伝衛門から伝授された算木積みが、この城に試されていたからである。

安土城の完成を尻目に丹波に攻め入っている明智光秀は、これまでの戦と違った苦戦を強いられていた。今までは全て信長の思考があり、命ぜられるままに従い戦ってきた。だが此度の丹波平定は光秀自身による調略と策謀が必要であった。

丹波に入った光秀は、丹波の国人たちの調略に取り掛かった。信長に降伏するよう呼び掛ける誘降作戦は、初めは成果を上げて八上城の波多野秀治がこれに応じ、これを機に丹波赤井党も降りた。

これで上手く運ぶつもりだった。だが、この頃まだ石山本願寺に手こずっていた信長から、急ぎ参陣せよと命が下り、取りも直さず

助勢に駆けつけた。石山本願寺一向宗は手強く、紀伊、雑賀衆の鉄砲攻めにあった光秀軍は天王寺の砦に敗走、すっかり囲まれてしまった。しかし危急を知って駆け付けた信長軍によって命拾いしたのであった。

丹波の国人たちに織田信長軍形勢不利の情報が流れると、丹波衆は光秀に反旗を掲げた。

八上城に籠る波多野秀治、秀尚、秀香の三兄弟は結束も固く強敵であった。

そんな時、大変な事が起こった。

信長の信頼する武将、摂津有岡城主、荒木村重が戦列を離れて居城に戻り、信長に謀反を起こしたのである。

信長にも光秀にとっても寝耳に水の出来事であった。

信長は荒木村重を心底信頼し、特別なほど重用してきた。

「何ゆえに、解せぬ」

信長は俄かには信じられなかった。何か訳があろうかと思い、羽柴秀吉に信長の右筆で堺の代官、松井友閑を付けて有岡城に向かわせた。

対面した時、荒木村重の決意は固く、言い訳は一言も無かった。

「あやつには、まだまだ働いて貰わねばならぬ」

信長にとって、荒木村重のような豪放磊落で、しかも冷静沈着も併せ持つ戦国武将はそうはおらず、大軍を委ねる逸材であったのだ。

信長はこれが最後と、丹波攻めの最中の光秀を呼んだ。

先年、光秀の娘は村重の一子、新五郎村安に嫁いでいる。その縁で光秀に仔細を聞かせようと有岡城に向かわせた。

「村重殿、貴殿とは幕臣時代からの戦友でござる。お館様は家中の瑕瑾は咎めぬと約束されてござる。この光秀、命に代えてもお守り致す。一緒にお館様の御前に参ろうぞ」

光秀の必死の説得にも村重は耳を貸さず、静かに答えた。

「事ここに至って申し開きは詮無きこと。光秀殿、長年のご厚誼かたじけのうござった」

村重は最後まで頑として聞き入れず、光秀は悄然として有岡城を後にした。

後日、光秀の留守を守る坂本城に、荒木新五郎村安に離縁された光秀の娘が、丁重に護衛付きで送り返されてきた。

この後、荒木村重の組下にいた武将、中川清秀と高山右近は村重を見限って信長軍に走り、村重は益々孤立したのであった。

「おのれ、村重許さじ」

信長は激怒した。

有岡城に信長軍がなだれ込んだ。だが村重の姿は消えていた。

なんと、妻子を棄て、家来を欺き、単身逃亡、伊丹から尼崎へと逃げに逃げ、毛利氏に庇護を求めたのであった。

「これが剛勇大胆で知られた荒木村重殿であろうか」

光秀は信じられなかった。

武将として最大の恥である。大将たる者、部下に対しての大罪である。光秀は嘆いた。

信長の村重謀反における仕置きは、冷酷無残を極めた。

荒木村重の妻子、眷属、家臣、下働きの男女に至るまで、六百人余を磔にして焼き殺したのであった。

信長は村重を最も信頼していただけに、憎しみがより一層激しくなっていたのだ。

これにより信長は、村重の組下にいた中川清秀、高山右近などを光秀の麾下に入れた。光秀はこれで丹波、丹後、摂津、山城、近江の知行を得て、新たに四万の兵士を与えられ、再び丹波制圧に向かったのであった。

八上城主、波多野秀治は意気盛んであったが、長きに渡る包囲で城兵には疲れが見え始めていた。

光秀は、投降せよ、さすれば主君より波多野三兄弟の助命の言質を取り付けると開城を迫った。

波多野秀治は、信長の敵への容赦無い残虐行為を知っているので、身の保証を取り付けるまで誰か人質を出すように光秀に伝えた。

この乱世にはよくある事で、古来よりの習わしでもあった。

光秀は思案した。

――人質か、はて誰ぞおらぬか。丹波平定に足を踏み入れ、いつの間にか四年以上の歳月が流れている。もうこれ以上長引かせれば信長様は激怒なされよう。ここのところ信長様家臣軍での、好敵手だった滝川一益、羽柴秀吉たちにも水をあけられてしまった。思えば一益は近江浪人、わしは美濃浪人、お互い意識して切磋琢磨してきた間柄だ。だがあの秀吉は違う。あれは足軽の出と言っているが、どう見ても武家の出ではない。おそらく百姓に違いあるまい。あの小者の秀吉には負けられぬ。

そんな思いが光秀の頭をよぎっていた。

光秀の側に、腹臣斉藤内蔵助利三が控えていた。

この斉藤内蔵助利三は、光秀と同じ美濃の出であった。稲葉一鉄入道の家臣であったが、跡継ぎの稲葉貞通と折り合い悪く、主家を出て光秀のもとに仕える事になった。これを不満とした稲葉一鉄は、信長に訴え出て光秀より利三を取り返そうとした。だが光秀は、武士の仕官は大名の裁量であるとこれを拒否、信長もこれを認め、この件は決着した。

斉藤利三は光秀が全幅の信頼を寄せる知将であった。

「畏れながら言上仕る」

利三が声を掛けた。

「お館様には、人質を出す人物をお考えにござりまするか」

「そうだ、誰ぞおるか」

「難しゅうござります。なれど一人」

「お、誰ぞ」

「お答え難きなれど」と言葉を切った。

「構わん、申せ」

「御正室様御母堂にござります」

「あ、母者か」

利三はこれ以上黙して語らず、光秀も黙りこくってしまった。

長い沈黙の後、光秀が口を開いた。

「波多野秀治が降伏し、安土に連れて行けば、信長様とて命は取るまい。領国安堵は無理としても屈強の誉れ高い丹波衆、武門の道筋は残すであろう」

「仰せの通りにござります」

「人質を殺める事は戦国の常なれど、波多野衆とて、老母を殺めるは武門の恥となろう」

「はい、此度はさほど難しくなく事が運ぶ気が致します」

「我が子を質に出す事ならず。なれど母者を差し出す事、奥がこれを承知するかの」

「お館様は陣を離れてはなりませぬ。このお役目それがしが務めまする」

「利三、泥を被ってくれるか。済まぬ」

光秀は深く嘆息し、沈んだ面持ちで天を仰いだ。

斉藤利三が交渉人として八上城に入った。波多野秀治には、人質は正室の母であることは伏せ、あくまでも光秀の老母と説明したのである。

「相分かり申した。我ら三兄弟の身、明智殿に委ねましょう。人質

としてお預かりし、老いた母御は、丁重に扱いまする。我ら丹波衆の名に懸けて、婦女子に手を掛けることはござらぬ」

利三は陣中の光秀に報告すると、すぐさま坂本城に向かった。

明智光秀の正室熙子は、妻木勘解由左衛門範熙の長女であった。父の勘解由左衛門は、もうすでにこの世に無く、その妻である熙子の母は、老いて坂本城に身を寄せていた。

この老いた義母は、武士の妻として慎ましく毅然とした物腰、物静かに老いる身を天に任せ、日々過ごしていた。

斉藤利三が城に来て、正室熙子とその母に仔細を話し、光秀の置かれている苦境を訴えた。

「母上を人質に出されるとは、お館様のお苦しみは分かりますが……」

と熙子が言いかけた時、

「お受けします」

と、老いた母が毅然とした声音で答えた。

熙子が顔を上げ、

「しばしお待ち下さい。私には親不孝はできませぬ」

「熙子、親不孝ではありません。逆です。親に幸をさせてくれる事

なのです」

母は淡々と語り始めた。

「黙って私の話を聞くのです。そなたは光秀殿に嫁ぐ前、疱瘡に罹り、そのような顔姿になりました。しかし光秀殿は心変わりもせず、それまでと同じようにそなたを慈しみ、子を成し、夫として男としてこれ以上のお方はおりません。親として何とありがたい事であったか……私はいつかこの光秀殿のご恩に報いたいと日々願っておりました。なれど女子の身ではそれも叶わず、このように年老いてしまいました。もう長くはない私の身に、ようやく役に立てる時が来ました。神仏に感謝します。私を丹波に送るのです。これは私の望み、親の望みを叶えるそなたは孝行者なのです」

母の言葉に涙を拭いながら、熙子は武将の妻として覚悟を決めねばならぬと思っていた。

明智光秀の丹波制圧は開始より五年近くの月日が流れたが、ついに終盤を迎えていた。

八上城より波多野秀治、秀尚、秀香の剛強三兄弟は光秀の陣に入り、降伏の旨を伝えた。入れ替わりに利三に付き添われて熙子の老母が人質として入城した。

光秀は波多野三兄弟を手厚く迎え、やがて三兄弟を伴って安土に向かった。

安土城内にて、光秀に付き従い平伏した波多野三兄弟を睨みつけて、信長は、

「捕えよ」

と激しい言葉を発した。

すぐさま三人は取り押さえられて、城内の牢に入れられてしまったのである。

血相変えて光秀が、

「お待ち下さいお館様、かの者たちは降伏し恭順の意を示しております。何卒武人の扱いをお願い仕ります」

「武士の扱いと申したな光秀。そなたに言って聞かす。波多野めは如何にも初めは恭順したが、石山本願寺攻めの中、背反しおった。これまでの松永弾正や荒木村重と同じ輩である」

「お聞き下さりませ、八上城にはそれがしの義母も質として差し出してござります」

「助命の保証として母を出したか。その事よ、誰が助命すると申し

た。其の方心得違いをしておる。先ずわしの助命可否の言あって事を図るべし。質の死するは戦国の常、其の方の母とて武門に生まれし者、覚悟の上であろう。事あらば其の方の浅知恵を恨むべし」

考えが甘かった。確かに信長の言う通り、助命可否の命令が先であった。光秀は言葉もなかった。

丹波の強雄、波多野三兄弟は安土慈恩寺にて磔の刑に処された。

丹波国人衆の細作の報せが八上城に伝わった。光秀軍が波多野の残党が籠る八上城に攻め入った時、城内の庭にて、人質となっていた熙子の老いた母は、磔にされて死んでいた。

明智光秀丹波制圧の悲しい結末であった。

主君正室御母堂を、自分の進言で殺害された責任を取り、斉藤利三は切腹しようとしたが、光秀が必死に制した。

「此度の出来（しゅったい）、そちになんら瑕疵は無い。見よ、そちの忠義の知恵と義母の命で丹波は我が領土となった。この先、忠義戦功第一の其の方がおらぬ家はどうなる。断じて割腹ならず」

斉藤利三は、明智家中に欠くべからざる存在であった。

「許せ熙子、わしが愚かであった。お館様の申される通り、わしの浅知恵を恨むがよい。全てわしの責任である。利三を責めるでない

ぞ」

熙子は何も言わなかった。言葉に出せば光秀も苦しむ、それでは母も悲しむであろうと、黙っていた。

暫く沈黙が続いた後、光秀がうめくように、

「降伏した者を許し、武門の道筋を残すと思ったわしが甘かった。これまでの乱世の習わしなど、あのお方には通用しない。お館様は鬼だ、美しい城に棲む鬼だ」

初めて熙子が口を開いた。

「美しい城には心清らかなる方が似合います。あなた様のような、正しき人が住むべきです」

光秀は黙って聞いていた。熙子のその言葉を胸に刻んでいるように見えた。

天正七年八月、織田信長、徳川家康の鉄の結束を見せていた織徳同盟に亀裂が走った。

両家を震撼させる事件が起こったのである。

徳川家康の嫡男、三郎信康と、その母で家康の正室の、主命の死であった。

家康の正室築山殿は、先に滅びた今川氏の血筋を引く女性である。その築山殿が、武田勝頼に通諜した。実子三郎信康を立てて、陰で武徳同盟を締結し、信長を討つという企てであった。これを知った信康の正妻で織田信長の息女五徳（徳姫）が父信長に密書で逐一報告した。信長は真偽を糾すべく、三河より家康の重臣酒井忠次を呼び付け詰問した。

「その噂、無きにしもあらず。家臣の苦慮するところにござります」

酒井忠次は多くは語らず、しかし否定はしなかった。

信長の決断は早かった。

「宿怨武田に内通せし如何なる者も断罪すべし。三河殿に望む。織田徳川の絆不変の証、速やかに築山殿、信康殿母子を失い参らすべし」

信長は盟友である家康に、織徳同盟を維持するか、武徳同盟に走るかを迫ったのである。

家康は窮地に陥った。信康は家の跡取りである。凶暴なところはあるが勇猛果敢で大将の器である。これを死なすことはできない。だが信長はあの気性である。絶対に許さないであろう。今織田と事を構えれば万に一つも勝ち目は無い。

家臣たちは御子の一人や二人でお家が滅亡しては堪らんと、織徳同盟の継続を望んでいる。家を取るか、妻子を選ぶか。家康は腹を決めた。

戦国大名の宿命、お家大事である。家康は断腸の思いで命を下した。

嫡男三郎信康を岡崎城から大浜城に移し、その後、遠江二俣城に閉じ込めてしまった。

そして先ず、正室築山殿を岡崎城から浜松城に移す途中、命を受けた野中重政が輿の外から槍を突き立て絶命させた。

報告を受けて家康は、次に二俣城にいる三郎信康に切腹を命じたのであった。

事ここに至って、信康も覚悟を決め、武門の若き棟梁らしく、潔く切腹した。

介錯人は服部半蔵正成と天方山城守通綱であった。

この大事件はすぐに織田家中に伝わり、光秀は嘆いた。

――なんという事だ。上様にとって徳川家康公は盟友ではないか。その跡継ぎである信康殿を親の手で自害させるとは、また正妻築山殿まで殺させるとは、前代未聞、異常な行為である。

この頃から、臣従する者全て、織田信長のことをお館様から上様と呼ぶようになっていた。

――上様は苛烈な考えを平然と押し付ける、正に鬼である。わしも向後、注意深く行動せずばなるまい。いつ何を申し付けられるか分からぬお方、誠に気をつけねば。

織田信長の家臣たちを震え上がらす事件が、またしても起きた。

信長が家中の粛清を断行したのである。

織田家累代の宿将、佐久間右衛門尉信盛とその子甚九郎信栄を追放したのであった。

佐久間信盛には、信長自筆で十九条からなる〝折檻状〟が突き付けられた。

内容はこれまでの戦に於いて何も戦功無し、明智光秀、羽柴秀吉は比類なき軍功であるが、汝ら父子は在陣しながら武勲これ一つも無し、などと論っていた。

佐久間父子は、剃髪して高野山に追放と命じられたが、やがてそれもならじと熊野山中に追いやられてしまった。

粛清はそれだけではなかった。

織田家譜代宿老、林佐渡守通勝も追放された。理由はなんと二十年前に、信長に逆らった弟信行を担いで、自分を殺そうとした罪であるという。もうこうなると狂気の沙汰であった。

信長にしてみれば理由はどうでもよかったのである。自分から見て役に立たぬ者は全て排除し、手足となる者を重用する。やがてやらねばならぬ、武田、毛利、長曾我部討伐の武将たちへの引き締めが目的であったのだ。

林通勝に続いて、安藤伊賀守守就、尚就父子、丹波右近氏勝も遠国に追放された。

光秀はぞっと身震いした。

――佐久間殿父子になんの落ち度があるのか。累代家老林殿に至っては、二十年前に遡る罪とは、呆れて物が言えぬ。使い捨ての厄介払いとはこの事よ。

光秀は自分の立場を考えた。

林通勝、佐久間信盛が追放された今、織田家の実力者としての序列は斯くの如しであった。

柴田勝家、越前、加賀五十五万石。丹羽長秀、若狭、近江三十万石。滝川一益、上野、信濃五十万石。羽柴秀吉、播磨、但馬五十万

石。そして自分は丹波、近江三十四万石。

――悔しきかな、あの羽柴秀吉より下位であるとは。だが上様は近々、追放した佐久間殿の領地を、このわしに分け与えると約束された。佐久間殿の寄騎もわしの組下に入れると申された。恐ろしきお方だが、去る丹波攻めでの、義母の見殺しを慮(おもんぱか)ってのことであろうか。そうなると禄高、兵力全てあの羽柴秀吉を大きく上回る。さすれば織田家中の実力者の序列も柴田、丹羽、滝川に次いで四番目となる。

光秀の思考は、段々羽柴秀吉への対抗意識に傾いていった。

――わしは自分を欲深い男とは思わぬ。あの男、羽柴秀吉が下位にあれば、それ以上は望まんのだ。累代の柴田殿、丹羽殿はともかく、滝川一益とわしは同じ浪人から身を立てた。共に刀槍の術も鍛え、鉄砲術も身に付けた。肝胆相照らす仲として、身を粉にして上様に尽くした。今や滝川一益は左近将監に叙され、上様より関東管領職を拝命されておる。戦友として心からめでたいと思っている。だがあの羽柴筑前だけは別だ。あの男、百姓の分際で武将に成りおった。上様が天下一の〝人たらし〟と褒め上げたが、わしにはあの男の下品さ、教養の無さが鼻について我慢できぬ。確かに秀吉は狡

知な機略を以って戦功を挙げてきた。戦況の判断早く、行動も機敏、だが戦場にて刀槍を振るうこと無し。将なればそれも良いかも知れぬが、あやつの上様に臆面も無くへつらう姿は、武士にあるまじきもの。朝廷、貴人たちとの仕来たりを知らぬあの男が、わしの上に立つ事は許されぬ。わしはあの羽柴筑前の後塵を拝する事だけは我慢ができぬ。断じてあやつの下風には立たぬ。

光秀の胸中では、信長に対しては恐怖心だけが段々と募り、秀吉には憎悪が大きく膨らんでいった。

天正九年、織田信長は京都に於いて〝御馬揃え〟を行うと布令を出した。

各国各将、揃って参加するよう伝令が走った。

御馬揃え、空前の織田軍団の閲兵式である。総奉行に明智光秀が拝命した。

内裏の東方に馬場を設営し、仮の宮殿も築営され、正親町天皇はじめ公卿の全て、さらに都の民衆が見物した。

織田信長の、敵対する者たちへの一大示威行為であるこの御馬揃えの行進は、天下の大盛儀となって後世にまで語り継がれた。

この天下の盛儀の後、信長は安土城に戻り、束の間の安息を楽しんでいた。これまでに幾度か開かれた城内茶会がまた催された。

茶亭信長、茶頭堺会合(えごう)衆の茶人、千宗易が務め、客は三位中将信忠、武井夕庵、滝川一益、細川藤孝、丹羽長秀、松井友閑などであった。

これら武人の他に、堺の豪商会合衆の長老格で茶匠の今井宗久、津田宗及もいた。

この頃になると千宗易は茶頭として、今井宗久、津田宗及は茶人として、信長に近侍していたのである。

信長は上機嫌で、高麗茶碗や松島の茶壷、姥口の茶釜などを自慢げに話し、久し振りの寛いだ笑顔を見せていた。

信長はこの時、やがて宿敵武田氏を討伐する為の鋭気を養っているのであった。

茶会が終わって、千宗易の屋敷では、宗易と今井宗久、津田宗及の三人が話し込んでいた。

「天覧御馬揃え、盛大でしたな」

と津田宗及が語り掛ける。

「三位中将様、北畠様、神戸様も見事な御馬揃えで、お父上の上様

も、大層なご機嫌でありましたな」

と今井宗久が答えた。

三位中将とは嫡男信忠、北畠とは次男の信雄で、伊勢の国名門北畠具房の養子に入り北畠姓を名乗っている。また神戸とは三男信孝のことで、北伊勢の国人神戸具盛の養子となり、同じく神戸姓を名乗っていた。

いずれも信長が伊勢平定の為の政略であった。

「総奉行の明智様も大層な立身出世でございます」

千宗易が答えると、これを受けて今井宗久が、

「それそれ、浪人の身を名乗り私の屋敷に居候していたのですからな。よくぞあそこまで出世なされました。上様に重用され、今では織田家中きっての切れ者、でも苦労が多いと聞いております。上様はあのご気性、安閑としてはおれません。何を思い付き、考え出すやら」

宗久が周りを眺めて声を潜めた。

「ある筋からの話ですが、上様は近々武田討伐の為、出陣されるとの事ですが」

「その話なら私も知っております」

と宗易。

「いや、その武田討伐後の話です」

宗久の言葉に、千宗易と津田宗及は続きを待った。

「武田を討った後、次は恐らく四国の長曾我部と中国の毛利に軍を差し向けるでしょう。その後、我々の堺に手を延ばすとの情報が入りました」

「堺の街をどうすると」

と宗易が聞く。

「上様は堺の街を解体し、直轄領として上様直々に貿易などの商いを始めるというのです」

「天下人が直々商いを」

と今度は宗及が聞いた。

「何を思いつくか分からぬお方です。あり得ましょうぞ。現にこの安土の城下も瞬く間に繁栄の街となりました。あのお方は武の才と商の才を兼ね備えておられるのです」

宗久は話し続けた。

「考えてもご覧なされ、天下布武を掲げて天下統一を目論むお方が、堺だけ自治を許すとお思いですか。必ずや、我ら堺衆を追い出し、

遠国との貿易を自らの手で始めることでしょう。それに」
「それに」
と宗易が重ねて尋ねた。
「伝え聞くところでは、隣国朝鮮との交易を深める為に、その布石として博多の豪商たちを近いうち安土城に呼ぶとの事です」
「博多の豪商」
津田宗及が呻いた。
「名を聞いたことはあるでしょう。島井宗室、神谷宗湛」
二人はううむと呻き、考え込んでしまった。
「我ら堺衆はどうしたらよいのですか、手をこまねいている訳には参りません」
と宗易が今井宗久に聞いた。
「前の時代なら堺の力で守り切れましたが、今の上様の力を以ってすれば堺は一捻りです。とても太刀打ちできません」
「宗久さん、何か手立てはありませんか」
「それが何とも。私は近々京に参ります。関白様にお目通りを願って、朝廷から何か手を回すことも考えられますが、これを上様が知ったら我ら堺衆の首が飛びます」

今井宗久はにやっと笑って首を竦めた。

「天下統一は我ら商人にとってもありがたい事ですが、上様は狂人とも思える苛烈なお方。誰ぞ、あの魔王を倒す武人でもおりましょうや」

今井宗久の言葉に、二人はどきっとして押し黙ってしまった。

「我らも堺の会合衆です。商人としての知恵を出しましょうぞ」

ここまで言って今井宗久は目を閉じ、この話を打ち切った。

天覧御馬揃え総奉行としての使命を終えて、明智光秀は久し振りに坂本城に戻り、しばしの平穏な日々を過ごしていた。

妻熙子も母を失った悲しみを面には出さず、何時ものように快活に振舞っている。

光秀はふと思い付き、数名の供を連れて馬を飛ばして城を出た。

穴太村に向かったのである。

領主明智光秀の思いがけない来訪を受けて、石切千四郎は戸惑ったが、なぜか心は嬉しかった。

「お館様、ようこそのお運び、恐悦に存じまする」

「おお、石切千四郎、暫くであった」

馬上から光秀も笑顔で答え、飛び降りた。
「急にそちを思い出しての、安土以来である」
「お館様にはご健勝にて、またご出世の段、おめでとうございます」
「わしは歳をとった。近頃は思い通りに身体が利かぬぞ。そちは変わらぬな」
「いえ、滅相もありません。私も歳を感じております」
「なかなかに。時に安土城はまた一段と煌びやかさを増しておるぞ、大したものだ」
「あのお城は美し過ぎます、これまでの、戦に備えた堅牢無比を誇る城ではありません」
「そちの申す通りである。上様は戦で守る城を築いたのではなく、大名、公卿、民衆、そして朝廷までも崇め奉る城を築こうと成された」
「朝廷もですか」
「そうだ、上様の思考の中には帝はおわさぬようだ。天下を統べるのは我一人とお考えかも知れぬ」
ここまで言って、光秀は喋り過ぎに気付いた。
「ははは、余計な話だ。これはわしの絵空事であった。忘れよ千四

郎」

差し出された渋茶を啜りながら、光秀は優しい顔で千四郎に語り掛けた。

「千四郎よ、あの多聞城が崩れ、天守の名のもとになった多聞閣が焼失した時、其の方たちの気持ちは如何ばかりであったか。辛い事であったの」

「お館様、城崩れても我々穴太衆の手に成る石垣は残っております」

「いかにも。されど造っては焼け、また造っては落ちる、これが戦乱の世。空しくなろうぞ」

「それはお言葉の通りにございます」

「近頃、上様は先を急いでおわすのか、益々過激な言動が多い。本来は、わしら家臣には及びもつかぬ聡明なお方なのだ。それが狂気としか思えぬ時がおわす」

「民からは魔王と呼ばれています」

千四郎が低く答えた。

「あの荘厳華麗な安土城を造られし上様。美しい城に相応しい主と成られるのはいつであろう」

「私は、あの信長様が、安土城を棄てる日が来るのではないかと思

います」
「なんと、城を棄てると」
「はい、いつかあの城が飽きて、そして棄てるのでは」
「ううむ、上様のご気性からして、それはあるやも知れぬな」
「私ども石工は、城の主となられるお方は、城を後世まで残す決意を持ち、それを貫く人を願っております」
「分かるぞ。あの美しき城が血で汚れることがあってはならぬ」
「信長様はきっと他にまた城を望まれるでしょう。その時はお館様があの安土城に入られ、お守り下さるのが望ましゅうございます」
「おお、夢のようだが、そういうことになればきっとあの城を守り抜くぞ、千四郎」
この後二人は、いつまでも楽しそうに語らっていた。

天正十年、織田信長は宿敵武田勝頼を討つべく号令を発した。
先鋒の指揮は三位中将信忠に命が下った。
長篠の合戦で織徳連合軍に破れてからは、隠忍自重していたかに見える武田勝頼であった。だが、覇気は衰えず、しばしば徳川家康の遠江に進攻し、戦を仕掛けていた。失った威信の復活を賭けてい

るかのようであった。
満を持して織田信忠軍が出陣した。
きっかけは信濃木曾領主、木曾義昌の背反。織田方に寝返ったのである。
木曾義昌は武田信玄の娘婿であり、武田の重臣の一人であった。
続いて小笠原信嶺も離反、重臣である武将が寝返って勝頼は激怒し、軍を率いて鳥居峠に陣を敷こうとした。しかし織田方に付いた木曾義昌軍が先鋒となり激突、織田軍の勝利となり武田軍は敗退した。
織田信忠軍はこれを追撃、伊奈に進攻したが、ここから先は険路でなかなか前に進めなかった。
だが一方の武田軍も勝頼の人望薄く、武田二十四将と呼ばれた嘗ての猛将たちも、時代と共に衰弱していたのである。
織田信長の盟友、徳川家康は、駿河を手に入れるのが宿願であった。
家康は信長に許可を得て、駿河口より進攻していた。
家康はかねてより、調略の相手に武田の重臣で駿河探題を務める穴山梅雪信君を選び、辛抱強く、武田を離反するように説得してい

たのである。
穴山梅雪は武田信玄の甥であり、信玄の娘婿でもあり、勝頼の義兄にも当たる、武田親族にして重臣の筆頭であった。だが当主勝頼とは反りが合わず、その確執は深刻であった。
家康はそこに付け入って調略していたのである。
家康は信長に、穴山梅雪背反の条件に〝穴山梅雪入道信君の所領安堵〟の承認を取り付け、寝返りを迫った。
とうとう穴山梅雪は武田勝頼を見限ったのであった。
織田信長は、今度の武田討伐軍には、播磨で合戦中の羽柴秀吉はそのまま残し、明智光秀を参陣させていた。
「利三、我が軍は後攻めである。此度は戦功は期待できぬな。筑前がおらぬゆえ、わしがひと働きせねばと気負っていたのだが」
光秀は苦笑しながら言った。
「殿、戦はこれからです。武田は死に物狂いで向かってきます。気を抜かぬように」
「分かっておる。上様は三位中将様の戦ぶりに期待されておるのだ」
信長は自分の後継者である嫡男信忠に、大将としての箔を付ける為、武田討伐軍先鋒の総大将に任命し、後方から援護の指示を出し

ていた。

武田勝頼は重臣たちから見放されていた。

信玄の弟、伊奈領主信廉は軍をさっさと引き払い、また従兄弟の信豊は病気で出陣せず、木曾義昌、穴山梅雪、逆心の報で、武田軍は戦意を失いつつあった。

その中で一人気を吐いて戦場に躍り出た武将がいた。勝頼の弟、仁科五郎盛信であった。

伊奈高遠城主仁科盛信は、信忠軍を迎え撃ち、孤軍奮闘、奮戦空しく壮烈な討ち死にを遂げた。

「名門武田の意地。天晴れの武将」

光秀は、盛信の死を惜しんだ。

織田信長は、

「此度の戦、武田軍を全て抹殺せよ」

と厳命していた。

武田信玄亡き後の妄執いまだ恐るべし。

二度と武田氏を復活させてはならず。生涯の大敵であった武田氏を信長は恐れていたのだ。

退いていく武田勢。残った居城、居館は焼き尽くされ、残った兵

士は全て成敗された。

だが徳川家康だけは違った。屈強な甲斐軍団を戦後己の兵力に組み入れ、強力三河軍を作るべく、降伏、帰順を申し出る兵士たちをできるだけ助命したのであった。

信長から総大将に任命された信忠は、甲斐新府城を目指した。武田勝頼の居城である。意外なことに勝頼は一戦を交えることも無く、城に火を放ち、落ちていった。

内実は防衛の軍勢に逃亡者続出、兵力一千にも満たない数だったのである。武田軍武将の離反がこの後続出していった。そんな中、知将と謳われる武田の重臣、上野沼田城主真田昌幸が自らの居城にて最後の一戦を勧めたが、それに反対した者がいた。勝頼の寵臣、小山田信茂である。

小山田信茂は、居城岩殿城に避難し時を図るべしと進言した。

勝頼は、信茂の進言を受け入れ、岩殿に落ちていった。

織田信長は、安土を発ってから自軍の勝利に次ぐ勝利の報に上機嫌でいた。今度の武田討ちには、なんと千宗易を伴っていたのである。陣中茶会を楽しまんとする信長であった。

武田勝頼を追い詰めたという急報が入ると、

「討ち漏らすな、必ず息の根を止めよ」

全軍に檄を飛ばした。

小山田信茂を頼って落ち延びようと、勝頼と嫡子信勝、正室、一門は駒飼に潜伏。ここで寵臣小山田信茂は、信忠軍の追撃がすぐ間近に迫っているのを知り、これはもう逃げ切れぬと判断、卑怯にも主君勝頼に、

「ここに至って守護致しかねます」

小山田信茂の冷酷な態度に、残る兵士五十人足らずの勝頼主従では、どうすることもできなかった。

「最早これまで」

勝頼は直後逃亡していった信茂を恨みながら覚悟を決めた。

田野というところまで逃げてきて民家に入り、妻子、一門などそれぞれ自刃させ、怯むものは惨殺した。残った兵士たちと討って出たが、最後は自刃して果てた。嫡子信勝は奮戦の末討ち死にした。

やがて勝頼と信勝の首級が信長のもとに届けられた。

新羅三郎義光に始まる甲斐源氏の嫡流、武田氏はここに滅亡したのであった。

織田信長は、信濃上諏訪の法華寺に宿陣した。
信濃は武田の縁深き地であったが、信長が進駐すると我も我もと信長に帰服して来たのである。これで甲斐、信濃は信長の手に落ちたのであった。
本陣にて全将が集まっていた。
明智光秀の隣には、近江大溝城主津田七兵衛信澄が座っていた。
津田信澄は、織田信長の甥であり光秀の次女の婿であった。久し振りに顔を合わせた信澄に、光秀は話し掛けた。
「やっと武田討ちも終わりましたな。我ら多年骨を折った甲斐がありました。祝着にござる」
何気ない普段の会話であった。だがこれが信長の耳に届いた。
「光秀、聞き捨てならぬ。その増上言、今一度申してみよ」
信長の叱声に驚いた光秀であったが、咄嗟に考えても別に悪しき会話ではないと確信していた。
「この光秀、何ぞご無礼の言、申しましたか。御気に障りましたるは光秀不徳の致すところ、平にお許しを」
「おうよ、其の方、今我ら骨折ったと申したな。汝、此度の戦、後陣に於いてなんの骨折りぞ。よく聞くがよい。誰が骨折る功を立て

たか、これを決めるのはこのわしである。わしの専権を其の方侵す気か」

「滅相もありません。私の心得違い、何卒お許し下さりますよう」

信長の詭弁には違いなかった。しかしこうなっては何を言っても無駄であった。ただただ謝るしかないのである。

「蘭丸、光秀の金柑頭を其の方の扇子にて打て」

小姓頭の森蘭丸に下知を飛ばした。

「は、お許しを、私にはできませぬ」

「これは君命である。打たねばわしに背く者と、汝の首刎ねるぞ」

「はは……」

「光秀の頭を打って、その増上慢を醒ましてやるがよい。早う打て」

光秀は目を閉じ、

「蘭丸殿、打たれよ」

と低い声で言った。

「惟任様、御免」

織田信長の面前である。森蘭丸は加減はかえって無礼と、手厳しく光秀の頭部を扇子で打った。

公の場でこれ以上ない恥辱を受けて、光秀は下がった。仮に死を

賜っても口は開かず、悲壮な決意であった。後方に座り込んだ光秀の目に光るものがあった。

娘婿の津田信澄は恐怖に怯えていた。

この男の、信長への異常な怯えには理由があった。信澄の父信行は信長の弟である。

二人の父信秀の死後、後継争いで信澄の父信行は、兄である信長に虐殺されたのであった。まだ幼かった信澄を信長は不憫に思い、殺さずに一門として取立て、戦場にて働くようになってから近江大溝城を与えたのである。

信澄は父信行を殺すほど激しい気性の信長に、幼い頃から自分もいつ父のように殺されるかと怯えて生きてきたのだ。舅の光秀を庇う事もできず、無言で俯き堪えていた。

光秀の古くからの戦友、滝川一益が見かねて、

「上様、それがし無粋なお願いがござる」

場の雰囲気を変えるように声を出した。

「申せ」

「畏れながら、勝利に高ぶるこの心気を、千宗易殿の茶にて、鎮められたしと願うております」

「おお、私も是非加えられたし」
三位中将信忠も一益の話に乗った。
「いかにも無粋な奴よ」
と言いながら、茶と聞いて信長の顔が緩んだ。
「茶の作法も弁えぬ奴が。よし、勝利の場である、特別許す」
滝川一益の機転であった。
翌日、織田信長は徳川家康に此度の三河軍の働きを褒め上げ、家康が長年渇望していた駿河一国を恩賞として与えたのであった。
安土に引き上げる信長は、家康の領国となった駿河と遠江を経由して帰る事にした。富士山を見物しながら家康の居城浜松城に入り、家康の心魂傾けた大歓迎を受けたのであった。
安土に凱旋しても明智光秀の心は傷付いていた。
――わしは上様に疎まれているのだろう。それは仕方ない。わしにはどうする事もできぬ。いつの日か林通勝殿や佐久間信盛殿のように追放されるのか、わしも使い捨てか……
光秀は益々暗澹たる気持ちになっていった。そんな傷心の光秀に、追い討ちを掛けるように信長から呼び出しがあった。

だが信長は、法華寺宿陣内の事は忘れたように、けろっとして上機嫌だった。

「惟任よ」

相変わらず機嫌の良い時は光秀をこう呼び、

「次は四国、長曾我部だ」

信長の会話は細かい説明を省き、常に簡潔であった。

先年、四国の雄、土佐国主長曾我部元親は織田信長より〝四国一島手柄次第〟の領国安堵を取り付け、阿波、讃岐にまで進攻していたのである。これまでの交渉役は全て明智光秀が担当していた。

「長曾我部元親、欲深い男だ。四国一島本気で取ろうと思うておる」

「畏れながら、それは上様がお認めになられましたる事。咎める訳には参らぬかと」

「惟任よ、あの折は石山合戦の最中であった。四国までは手が回らぬ。三好三人衆を京から追い出した後、四国は元親と盟を結んで治めねばならなかった」

「よく分かっております。元親殿の力なれば、四国一島は安堵のまま良いのでは」

「ならぬ。天下布武の大義のもと、四国一島を束ねる者あってはな

らぬ」

「お叱りを覚悟で申し上げます」

また殴られては堪らぬと、光秀は先手を打った。信長はにやっと笑った。

「四国一島切り取り勝手の朱印状を与えし今、長曾我部を討つは約束を違えし事、天下人の上様にこそ、あってはならぬ事と考えます る」

「道理である」

素直な答えが返ってきた。

「わしの前では家臣の者全て、追従しか物を言わぬ。特にあの猿面はの」

猿とは言わずもがな、羽柴筑前守秀吉の事である。

「わしに、筋の通る事をもの申すは惟任ただ一人。なれど惟任、天下統一は道半ばである。わしも、もうすぐ五十路を迎える。四国は無論、中国、九州にまで平定せねば天下統一とは言えぬ。急がねばならぬ。四国のような大国を治むる者は、わしの直臣でなければならぬ」

いつになく信長は饒舌であった。

「わしは羽柴筑前の甥とか申す者が、三好康長の養子になるを認めてやった。三好康長は四国の名門である。筑前の為、阿波の安堵はしてやらねばならぬ。ついでに伊予も讃岐も長曾我部には与えぬ事にした」

筋の通らぬ乱暴なやり方であった。

羽柴秀吉が甥を立て、三好康長に肩入れして、折角の光秀の苦心の仕置きに横槍を入れてきたのである。

信長が、それら全ての事を決めてしまったのではどうしようもない。光秀は腹の中で、

――あの筑前め。

と舌打ちした。

「惟任よ、この件そちの立場がないこと承知である。長曾我部元親が、土佐一国にて承服せぬなら、四国に兵を出す。理屈がどうあろうと、長曾我部討伐となれば、これまでに関わった者が先陣を務めるは武門の習わし。惟任よ、その時は先鋒大将となりて土佐に兵を進めよ」

光秀は拝命を待つしかないのを悟っていた。

信長の話はこれで終わりではなかった。

「大坂に城を築く」

信長が単刀直入に言った。

「わしは四国も中国も遠からず平らげる。いずれ九州もである。その後天下統一なれば、異国との交易もわしが直にせずばなるまい。その時は堺などの商人ずれには事が大き過ぎて任せられぬ」

光秀は驚きを隠さず聞いている。

「堺は解体して、わしの直轄とする」

信長の言葉に熱がこもってきた。

「次に、大坂石山本願寺跡に城を築く。あそこはの、海に面しており、東西南北全ての街道の中心となる場所である。広大なる土地があり、この安土の倍の城が築けるのだ。天下に号令するに相応しい、豪華な巨城を大坂に築き、明、南蛮と交流を深めるのだ」

信長の眼が興奮で輝いていた。

「思えば安土築城の時は、石山本願寺、武田、上杉、毛利など強敵が犇(ひしめ)いておった。朝廷からも堺衆からも目が離せず、それらの示威の為の城であり、天下を統べる為の城にあらず。これより臣従する者も益々増える。城も街も全てが収まる大規模な土地が必要となろう。大坂がその条件を満たしてくれる」

信長はにやっと笑い、

「それにな惟任、わしはこの城に飽いた。築城して七年、我が造りし城なれど華美に過ぎた。伴天連共や公家衆が天下一の美城と煽ておったが、わしには窮屈な城となった。大坂に築城せしのちは、この安土城、誰ぞにくれてやろう」

光秀は黙ってここまで聞いていたが、

「三位中将様にお譲りが喜ばしいかと」

「いや、倅共は四国、中国、九州のいずれかにそれぞれ住まわせ、大国統治の要と致す」

「雄大なるお考え、畏れ入りました」

「この安土城は家臣の中より選び出しておる」

「ほう、いずれの方に」

「其の方か羽柴筑前だ」

「これはあまりに過ぎたお話。それがし、とてもお受けするに自信がござりませぬ」

「滝川一益は関東にあって、奥州にも睨みを効かせねばならぬ。柴田勝家も北陸、両越、奥羽を見据える拠点からは外せぬ。丹羽五郎左は家老としてわしと大坂に入る。残るは筑前と其の方ぞ」

信長は面白そうに話を続けた。

「機を見るに敏なる筑前が、一歩前に出ておる。あやつは不思議に使い減りがしない男だ。わしの手足として使い勝手が良い」

「仰せの通り、筑前殿は機略に長けたお人にござります」

またしてもあの筑前の名か。機略ではなく狡知に長けた男であると光秀は思っていた。

「だがのう、あの猿面にこの城くれてやると、あの教養の無さ、下品なる男の手に掛かって、この崇高なる安土城も、たちまち悪趣味の権化の城と変わろうぞ。これは堪らぬ。あはははは……」

信長は笑い出した。

信長は、羽柴秀吉の無教養、悪趣味、下品さを全て知り尽くして使いこなしているのであった。

信長の笑い声を聞いて、光秀は胸中呟いた。

――上様の言う通り、この美城は筑前が住めば様変わりするであろう。千四郎よ、お前が言った通り、上様はこの城を捨てて、他に城を求めるぞ。上様も筑前も後世にこの城を残す事など毛頭考えてはおらぬぞ。

光秀は安土城の事を思い巡らしながら、いずれ発せられるであろ

う土佐長曾我部討伐の準備の為、帰途についた。
この頃光秀は丹波亀山城を主城とし、熙子の住む坂本城を行き来していたのであった。

坂本城では熙子がかいがいしく光秀の為に働いていた。城内は四国討伐の為、その準備で大わらわ、落ち着かぬ日々が続いていた。
夜、寝所で久し振りに床を共にすると、
「お疲れでございましょう」
と熙子がいたわるように光秀に話しかけた。
「わしよりもそなたのほうが疲れよう」
「いえ、大丈夫です。それより海を渡っての合戦、戦勝祈願もして参りました」
「そうか、暫くまた城を離れることになろう。留守を頼むぞ」
「はい、憂い無くお出ましなされませ」
光秀は熙子の手を取り、横に寝かせ、優しく抱いた。
――この熙子と共に安土城に住んでみたいものだ。
光秀はふと信長の言葉を思い出し、琵琶湖に映る、かの城を思い浮かべてみた。

明智光秀の期待は裏切られた。

四国長曾我部討伐軍からは光秀は外され、総大将に織田信長三男神戸信孝が任命され、副将に丹羽長秀、津田信澄が付けられた。

――なぜだ。上様はこの光秀に命じると言われた。また約束を違えるのか。討伐はその関わり深き者が先鋒を務めるのが古来よりの習わしではないか。

光秀の頭に追放された林通勝、佐久間信盛の顔が去来した。

憤懣やるかたない光秀に、信長の使者として森蘭丸がやってきて、口上を伝えた。

「三河守様、此度駿河一国を拝領せし御礼に徳川家重臣と穴山梅雪入道殿も同行し、安土城に来られます。その接待役に惟任様を任命され、饗応の宴の仕度に取り掛かるようご下命になりました」

「承りました。お役目ご苦労にござります」

光秀は怒りを鎮め慇懃に答えた。

――貴人のもてなしの仕来たりは織田家中では細川藤孝殿かこのわししかおらぬ。しかし、武人のもてなしなら他におられるであろうに。徳川家康殿は別格なのであろう。つまらぬ役目、致し方ない。

憂鬱な気持ちで光秀は安土城に向かった。

家康は護衛を伴わず一行三十名で安土にやってきた。信長に対しての気配りであった。一行は宿舎の大宝坊寺に入った。大宝坊では家康の前に光秀がかしずき、丁重に口上を述べ、接待役を仰せつかったことを伝えた。

この日から光秀の昼夜に渡る気苦労が始まった。

一日目は安土城にて歓迎の式典、茶会、大宝坊での祝宴、二日目は摠見寺にて幸若舞を楽しんだ。三日目は高雲寺にて猿楽を観賞後、饗応の宴の予定であった。

ここで信長の狂気がまた起きた。

「光秀は暗い」

発した言葉はこの一言であった。

――我が盟友三河殿にあの暗い顔は何事ぞ。光秀は教養人であるが暗すぎる。朝廷などの貴人なら慇懃なあやつでも良い、だが此度は戦勝の浮かれ気分で、陽気でなければならぬ。やはり細川兵部大輔に命ずるべきであった。

そんな時、信長のもとに中国を転戦中の羽柴秀吉からの急使が届いた。

この頃秀吉は毛利氏の宿将、備中高松城主清水宗治が籠る高松城

を包囲し、足守川を堰き止め、城を水攻めにしていたのである。戦上手な秀吉は遠国での野戦で兵士を戦死させることをできるだけ避けていた。兵糧攻めで吉川経家の鳥取城を落とし、今度は水攻めであった。急使の内容は、いずれ高松城も落ちましょう。清水宗治も討ち取りまする。なれど近々毛利の援軍がやってきます。毛利輝元、吉川元春、小早川隆景の総軍勢では持ちこたえるに兵力が足りませぬ。よって援軍をお願い致します。という事であった。

「よし、光秀の接待役を解任させ、備中に向かわせる。三河殿にはこののち堺に足を伸ばして名物茶道具などを楽しんで頂こうぞ。追々わしも京の用事を済ませ、信忠を従え、中国に向かうとしよう」

信長は蘭丸に下知を飛ばした。信長の行動は早かった。大宝坊の宿舎に家康を訪ね、折角だから堺の街まで足を伸ばすことを勧め、堺代官松井友閑に委細取り仕切るよう命じた。その足で光秀が家康饗応の宴の準備で指揮を執る高雲寺に向かった。到着してすぐ信長は、

「この異臭は何ぞ」

と叫んだ。

慌てて出迎えた光秀に、

「汝、三河殿に腐った魚を膳に添える気か」
「いえ、滅相もありません。これは京より呼びし腕の立つ料理の長(おさ)が吟味してあるもの。傷んだものにはござりませぬ」
「よし、腐ってはおらずとしても旨そうには見えぬ。棄ててしまえ」
と料理を蹴り上げてしまった。
「お怒りをお鎮め下さりませ。別の物を至急用意致しますゆえ」
「別の物とは何ぞや」
「いや、それは、直ちに考えますれば」
「愚かなり金柑頭」
信長は光秀を蹴り上げた。
倒れた光秀を再び蹴ろうとした時、森蘭丸が光秀の前に進み出(い)で、
「上様、お静まりを」
と必死でとどめた。
「もうよい、蘭丸どけ」
信長は息を整えて、
「光秀、三河殿に限らず人は多種の好みがある。せめて四種ぐらい、それぞれの好みを分けて用意しておくものなり」
信長の難癖がまたしても光秀の頭上に浴びせられた。

真っ赤な顔で平伏する光秀に信長が、

「もうよい、光秀、三河殿接待役はこれにて罷免とする。其の方は早速領国に戻り、軍勢を整えて、筑前の毛利攻めに加われ」

突然の罷免通告であった。

信長にしてみれば、接待役解任ののち中国に出兵させるのは予定通りだったのである。だが、魚の異臭騒ぎで余計な仕置きをしてしまい、作戦の重要性を話す機会が無くなってしまった。

この後信長は、光秀に重大な誤解を与えてしまうのである。

光秀が安土を発つ前に、信長からさらに命令が下った。

「近江と丹波の所領を召し上げる。即刻、坂本、亀山両城を引き払うべし。ただし今の兵力はそのまま其の方に預けおく。筑前の援軍として急ぎ備中に出陣せよ」

光秀は顔色を変えて質問した。

「知行地をお返しの後、兵力そのままなれば、いずれいずこに落ち着きまするか」

「それよ、中国を攻めて先ずは出雲、石見の二国、切り取り勝手である」

同じ事を書き記した朱印状を前に放り投げた。

光秀は無言で押し頂き下がっていった。

これが誤解であった。信長は光秀が強敵毛利を見事打ち破る事を期待していた。光秀の退路を絶っておけば、領地奪い取るしかなく、戦功を挙げるであろう。このまま知行地を召し上げておく気は毛頭なかった。

丹波亀山に行かず、近江坂本城に戻った光秀は、信長に対してこれまでに無い怒りを感じていた。

――これ程までにこのわしを嫌っていたのか。いずれこの身は林通勝、佐久間父子、安藤父子のように追放されるのか。知行地を奪われし今となっては、兵力そのままと言っても、これは筑前秀吉への援軍ではない。あの筑前の寄騎となれ、秀吉の傘下に入れということである。あの狡知で無教養で下品な筑前の組下になるとは。あの百姓上がりの猿面にかしずく事になるのか。あやつの後塵を拝しては我が軍団の士気は上がらぬであろう。わし自身死ぬよりも辛い事である……断じてあの男の下風には立たぬ。

信長に対しては恐怖心から怒りに変わり、羽柴秀吉には憎悪が膨らんでいくのを感じた。

光秀は近江坂本城を慌しく整理し、丹波亀山城に入った。中国遠征の為の兵糧、矢玉を整え、城明け渡しの準備を済ませるには時が無かった。

城中は大騒ぎであった。明智左馬助秀満が報せを持ってきた。この左馬助は今は光秀の娘婿になっていた。光秀の長女が荒木村重の子新五郎村安と離別し、この左馬助に再嫁していたのである。

「上様は家康公の浜松へのお戻りをお見届けの上、中国に出陣なされる由。それまでは京の都、本能寺にご滞在なされますとのことです」

「しばらく京におわすか」

光秀は頷いた。やがて気を取り直して、

「左馬助、わしは戦勝祈願の為、愛宕山に参る」

戦の神を祀る霊場、愛宕神社に参籠することにした。

そこには意外な人物たちが、明智光秀を待ち受けていたのであった。

折しも、天下に聞こえた連歌師、里村紹巴から誘いを受け、光秀は西の坊、威徳院で連歌の百韻興行を開くことになり、愛宕山に登っていった。珍しく境内で御籤を引いた光秀は、目を通したのち、

計三度も御籤を引き直した。最初は凶、吉、大吉となって苦笑してしまった。

山僧が丁重に出迎え、連歌会の前に先ずはご休息をと、離れの書院に光秀を案内した。

先客が光秀を待っていた。前の関白、近衛前久と、上級公家の吉田兼見であった。そして、少し離れた下座に今井宗久が控えていた。

「あ、これは前関白様と兼見卿、それに宗久殿、一体これはどうしたこと」

光秀は驚いた。

近衛前久がすぐ光秀を招じ入れ、自ら襖を閉め、座についた。

「惟任殿、私は朝廷より直々にこなたに会うように仰せつかり、信長公には内密にて、ここでお待ちしておりました」

「上様内密に」

光秀は警戒した。

ここで驚くべき事が打ち明けられた。

前関白近衛前久が、光秀に向かって話し始めた。

「織田信長公が正親町天皇に譲位を迫っている事は惟任殿もご存知でありましょう。帝におかせられては、信長公の独断専行に何かと

抵抗なされても、武力を持たぬ朝廷としては限界がございます。織田信長殿は帝を退位させた後、皇太子誠仁親王様を即位させて自身が後見人となり、朝廷をも専断し、自ら天子様に成り代わりて、新しき王位に就く野望に燃えております。帝におかせられては、この天を恐れぬ魔王の如き織田信長殿を倒して、元のように朝廷を崇め、守護し、天下の政（まつりごと）のできる教養ある武人の現われ出でるのを待ち望んでおられます。惟任殿、帝はこなた様を信頼しておられます。本日、身は帝より直々に惟任殿にお伝えするよう、勅使として罷り越しました。ここに御同座の吉田兼見卿は誠仁親王様の親書を持っておられます」

「なんと、勅使とは畏れ入ります」

光秀は顔色を変えた。

「惟任殿、織田御家中で朝廷が頼みとするお方は、貴殿だけでございます。惟任殿が領地召し上げられたる事、帝もすでにご存知でおられます。帝におかれましては、いたく気の毒に思っておられます」

「前関白様、はっきり申して下され、この光秀に何をせよと」

「織田信長殿は、京、本能寺に入られました。お供をするは、小姓衆、女房衆など百人に満たない数です。直轄の軍団は四国、中国に

向けて発たれました。つまり信長殿をお守りする将兵はいないのです」

ここまで聞いて光秀は、近衛前久たちが何の用でここに来たかを理解した。

「惟任殿、帝は貴殿に織田信長殿を討って貰いたいと仰せにござります。そして、討つには今、この機しかありません」

ここで初めて吉田兼見が話し掛けた。

「惟任殿、誠仁親王様の親書には、貴殿が織田信長殿を討ち取った暁には、朝廷から勅諚を受け、新しき施政者として宣下されるようお約束すると書かれております」

「お待ち下され。朝廷を疎んじる上様には、それがしも頭を痛めているのは確かです。だがあのお方を討ち、取って代わってそれがしが天下に号令するは、とてもできる事ではありません。内裏にお伝え下され、光秀その任に非ずと」

「明智様」

下座に控えていた今井宗久が声を出した。

「我ら堺の会合衆、軍資金として数万、いや数十万貫でも、今すぐご用立て致します」

光秀は今井宗久に向き直り、

「堺衆も、上様を見限ると申すか」

「はい、織田信長様は、もうすでに堺を潰すつもりでございます。此度本能寺の茶会は我ら堺衆に代わりて、博多の豪商茶人、島井宗室、神谷宗湛が呼ばれております」

「待たれよ、千宗易殿は如何に」

「千宗易も会合衆にござります。この謀（はかりごと）の為すでに動いております」

今井宗久は、常時の如く落ち着いて話を続けた。

「明智様、柴田勝家様は加賀におられ上杉と対峙して動けません。滝川一益様は関東の要ゆえ、北条を牽制してこれもすぐには動けません。丹羽長秀様は神戸信孝様と四国に向かっております。あとは羽柴秀吉様も、ご存知の如く中国毛利に釘付け状態。つまり織田信長様の周りには主だった将兵がおられません。何卒、ご決意を、天はあなた様にお味方するでしょう」

光秀は宙を見据え、黙考した。

この後、高名な連歌師、里村紹巴たちと、西の坊威徳院で連歌百韻興行が開催された。この里村紹巴も勅命を受け、光秀に決起を促

す為に一役買ったのであった。

連歌会での明智光秀の発句は、

ときは今　あめが下知る　五月哉

であった。

織田信長は軽備で小姓衆と女房衆を伴い、京都、本能寺に入り、翌日御所を参内、のち嫡男三位中将信忠の訪問を受けた。

信忠も五百余の護衛の兵士のみで、妙覚寺に宿陣していたのである。

この日は博多の豪商、島井宗室と神谷宗湛が信長に呼ばれて訪れていた。二人は挨拶の口上の後、名物、名品の茶器を献上していた。

信長は二人から、これからの明、朝鮮の交易の拠点、博多の様子などを興味深く聞き入っていた。

夜になり、信忠も博多商人も去り、信長は森蘭丸たち数名の小姓たちに語っていた。

「これから堺を潰す。千宗易は茶人としてそのまま近侍させるが、他の商人どもは追放する」

信長は蘭丸に話し続けた、今宵は上機嫌であった。

「それと安土城だ」
「え、お城をいかがなされます」
蘭丸が尋ねた。
「安土城はもう飽きたわ、狭くてならぬ。わしは大坂に新城を築く。あの城は惟任にくれてやる事にした」
「安土城を惟任様にですか」
「そうよ、あやつ、このわしに憎まれていると思うておる。如何にも小賢しく、小面憎いわ。しかし殴られても殴られても忍従しておる。あれほどの男、我が家中に他におらず。大将の器としては三河殿を凌ぐであろう」
森蘭丸や側にいる他の小姓たちも、目を丸くして信長の本音を聞いていた。
「中国を平らげたら二国くれると約束したが、それは方便、あやつへの激励だったのだ。
あの男にはそれ以上の物をくれてやる。近江一国と丹波、それに丹後もだ。そしてあの安土城をくれてやる。驚くであろうな。あやつ、このわしがこのように考えおる事も知らず、猿面のもとに寄騎として参る事に腹を立てておろう。これで良いのだ。安土城をくれ

た時、わしの心を知ろう」

本能寺の夜、織田信長は楽しそうに声を立てて笑っていた。

明智光秀は丹波兵団一万三千を率いて亀山城を発った。

摂津三田で光秀の寄騎、池田恒興、中川清秀、高山右近ら一万の軍と合流する事になっていた。

山城、丹波の国境である老坂（おいのさか）にまで来て、軍を止め休息とした。

これより右は播磨に続く三田道、左は京の都である。光秀は重臣たちを招集、ここで軍議を開いた。

家老の溝尾庄兵衛茂朝、腹心の斉藤利三、明智秀満などは、光秀の胸中を探ろうとしていた。

長い沈黙が、重苦しい空気となって流れていった。

光秀が重い口を開いた。

「先日、前関白近衛前久様を通じて、このわしに朝廷より勅命が下った」

間を置いて、光秀は意を決して言った。

「主君、織田信長様を討てとの命である」

光秀はゆっくりと愛宕山での一件を説明した。

「帝を軽んじ、朝廷をないがしろにする信長様を主君と仰いだわしは間違いであった。挙句に、こののち我らは、羽柴筑前の組下に成り下がるのだ。わしは断じて、かの者の下風には立たぬ。わしは決心した。織田信長様を討つと」

重臣たちは驚愕で暫く声も無かった。

「わしの言に異議ある者、名乗り出よ」

光秀の声に、

「お館様のお決めになられた事、我らに異存ありませぬ」

左馬助秀満が先を切って答えた。

「胸中お察し致します。事ここに至って否応なし、一同お供仕ります」

斉藤利三が腹を決めて答えた。丹波衆の重臣たちもこれに続いた。

老坂を発する時、兵士たちには、これより京に入り、上様に軍勢を御高覧に入れたのち播磨に進む、と説明したのであった。

深夜、京の都の灯が見えるところまで来て、光秀は全軍に命令を発した。

「これより明智日向守光秀、朝廷より勅命を受け、織田信長様を討つ」

そして一気に声を張り上げた。
「我が敵は本能寺にあり」
「あの音は何事か」
織田信長はがばっと起き上がった。
「誰かある」
声を聞いて宿直（とのい）の小姓が飛び出してきた。
「見て参ります」
と外に駆け出していった。
信長はこれは只事ではないと思った。敵襲のような物音である。
緊張が走った。
森蘭丸が外から襷掛けで走り込んできた。
「一大事にございます。敵襲にございます」
「何処の手の者か確かめよ」
すぐその後、蘭丸の弟、力丸と坊丸が駆け込んできた。
「水色桔梗の旗幟が翻っております。惟任殿の軍勢かと思われます」
「光秀よな」
光秀の謀反と聞いて信長は覚悟を決めた。

光秀なれば緻密に練り上げた決起であろう。恐らく信忠にも手が回っているに違いない。不思議と冷静に判断することができた。

「上様にあれ程目を掛けられた惟任、大恩ある上様に何の謀反ぞ」

と蘭丸が叫び、

「この暴挙、断じて許されませぬ」

と力丸。

口々に小姓衆が叫んでいるのを信長は冷ややかに、

「是非に及ばず」

と一言いった。

「誰かある。女房衆を連れて逃げよ。光秀は女、子供に手は下さぬ。後の男共はわしと戦え」

信長は若き頃を思い出す如く、弓矢を取り、寝所を躍り出た。

塀を乗り越え明智勢が地上に降り立った。

信長は颯爽と矢を放つ。矢を受けた兵士がのけぞり倒れる。続けて弓を引き絞り矢を放つ。また兵士が喉を押さえて突っ伏す。

「これは面白いぞや」

信長は楽しそうに叫んだ。だがどんどん敵勢が増えて眼前に迫ってきた。防戦に努める小姓たちも槍に突き立てられ、倒れる者、下

がる者もいた。だが全員逃げずに戦っている。

信長は覚悟を決めて、弓を捨てた。

「最早これまで。蘭丸、わしは腹を切る。わが屍、惟任に渡すな。全て焼き尽くせ」

と命じた後、本堂奥の院に入っていった。

奥の院で火を放った後、信長は自刃した。身を焦がす熱さは感じなかった。

――惟任よ、わしの心を読めぬ、これだけの男であったか。惜しいかな、あと一年あれば天下布武は成し得たかも知れぬ。人間五十年、天命なれば悔いは無い。夢まぼろしの如くなり。

織田信長、四十九歳の最期であった。

同じ頃、京都妙覚寺に宿営していた三位中将信忠にも、光秀の軍勢が夜襲を掛けていた。

信忠も落ち着いて応戦しながら包囲網を突破し、近くの二条御所に立て籠もった。手勢五百は半分に減っていた。

二条御所には皇太子誠仁親王が住まわれていた。信忠は誠仁親王を戦に巻き込んではならじと、御動座の為、一時矛を収めるよう光

秀側に通告した。天龍寺に陣取る光秀はこれを了承、誠仁親王が御動座ののち再び攻撃を開始した。

衆寡敵せず、信忠勢は次々に討ち取られていく。

信忠は二条御所に火を放つと、父と同じく火中で自刃した。

「我が屍、惟任に渡すな、焼き尽くせ」

父信長と同じ言葉を発した。

ここに織田信長、信忠父子は、期せずして火炎の中、灰燼に帰したのであった。

床几に掛けた明智光秀のもとに、織田信長、信忠父子の焼死の報せが入り、続いて所司代、村井貞勝の死も、もたらされた。その後、信長、信忠の遺体はとうとう見つからなかった。

――信長公の遺体が無い。まさか生きているのでは。

光秀は不安に駆られた。

呆然としている光秀に代わって、斉藤利三が手早く動いていた。

右筆を呼び寄せ光秀に向かって、

「お館様、急がれますよう」

と促した。

気を持ち直して光秀は、右筆に指示を出し始めた。

先ず、親類に当たる津田信澄に宛てた書状、続いて細川藤孝、忠興父子に、そして筒井順慶、定次父子にそれぞれ書状を書いた。

これぱかりではない。組下の池田恒興、中川清秀、高山右近にも次々に書状を書いて送り届けた。

また敵将たち、越後の上杉景勝、土佐の長曾我部元親、中国の毛利、吉川、小早川の三氏にも密書を送ったのであった。

それぞれ文面の口上は違えど、自分は私怨の為に織田信長公を討ったのではない、正親町天皇の勅命により決起したのだ、これよりは朝廷を立て、天子様の下(もと)お力をお貸し候え、という内容は同じであった。

それぞれの武将には、恩賞、領地分与、領国安堵を大雑把に書き込んであった。

光秀には、ゆっくり考える余裕が失せていた。日が経つにつれ、光秀に焦りが生じてきた。

先ずは徳川家康を堺より取り逃がした事である。返すがえすも残念であった。

徳川家康は、本能寺の変を知らされると、すぐ堺を出立、なりふ

り構わず逃げた。伊賀越えをして、海上より領国に逃げ込んだのである。道中一緒だった穴山梅雪は家康と別行動を取ったが、途中で一揆衆に襲われ、殺されてしまった。

光秀はこのあと、帝のおわす京都を固めた。

朝廷よりすぐに禁裏守護の勅命がもたらされた。これにて光秀は京都守護職となった。

光秀は御礼として朝廷に金子、銀子を献上、近衛前久と吉田兼見の公家衆にも謝礼に金銀を差し出した。

だが、日が経つにつれ光秀は、思惑が外れるのを感じていた。

一つに、娘婿の津田信澄が大坂で切腹した。舅の光秀と謀反を謀ったと見られたのである。織田信長三男、神戸信孝と丹羽長秀に攻め立てられ、自害して果てた。

他に頼みとした筒井順慶は優柔不断であった。順慶は嘗て、光秀の次男、十次郎の養父であったが、先年十次郎が病死した為、親類の縁は切れていた。最初は光秀に味方する事を約束し、大和を出陣して洞ヶ峠まで来たが、気が変わり兵を引き揚げてしまった。光秀を見限ったのである。

光秀にとって一番堪(こたえ)えたのは、細川藤孝、忠興父子であった。

老獪な細川藤孝は、忠興と共に髻(もとどり)を切って織田信長に弔意を表し、家督を忠興に譲り隠居してしまったのである。光秀は、細川父子だけは味方してくれるものと信じていただけに、落胆は大きかった。

組下の池田恒興、中川清秀、高山右近も離反していった。彼らは一様にして、

「かかる大事なる事、なにゆえ事前に我らに知らせぬ。謀反とはけしからぬ仕儀」

と怒り狂った。

織田信長、死した後もその威衰えず、光秀を打ちのめしていた。

覇気の乏しい主人に成り代わって、左馬助秀満と斉藤利三が奮闘し、京、山城、近江と信長の残党軍を掃討していった。

そのころ安土城は、蒲生賢秀が留守居役として城を預かっていた。信長の死が知らされると、息子の氏郷を呼び、信長の妻子を連れて居城日野城に退去していった。

やがて無人となった安土城に、明智光秀は入城したのであった。

――千四郎よ、安土城にわしは入ったぞ。だがこれから先、ずっと住めるとは思えぬ。わしはどうすべきかの。この美しき城を手に

入れても感動は湧かぬ。

天守閣には、織田信長が貯蔵した金銀財宝が、そのまま手付かずに残されてあった。

「流石は蒲生賢秀殿。普通なれば城を焼き、我らの行く手を遮り、金銀などは持ち去るものを。織田信長公の天下の美城を焼いて、財宝を盗み去ったと、後世にまで嘲弄されるのを避けられた」

と家臣に話した。この時の光秀の判断は正しかった。

光秀は金銀を受け取り、家臣たちに分け与え、朝廷にも多額の金銀を献上した。

一段落してのち、左馬助秀満にこの安土城を守らせ、再び京に向かわねばならぬ時がきた。

光秀は左馬助に、

「やがてここにも敵が押し寄せるであろうが、この美しき城に籠りて戦火を交えてはならぬ。敵わぬ軍勢ならばこの城を棄てよ。なれど決して城に火を放ってはならぬ」

「心得ました」

左馬助秀満にもその意味が十分に分かっていた。

光秀が左馬助に最後に残した言葉は、

「この城は断じて焼いてはならぬ」
であった。

事態は急変した。

明智光秀が最も忌み嫌う、羽柴筑前守秀吉が行動を開始したのである。光秀が放った毛利への密使が秀吉軍の網にかかり、秀吉は本能寺の変を知った。

狡知に長ける秀吉は、天賦の人たらしで毛利氏の外交僧、安国寺恵瓊を使って和睦の交渉を取りまとめた。

水攻めの高松城の兵士を助ける代わりに、城主清水宗治を切腹させる条件が整い、実行された。

毛利輝元領、備中、美作、伯耆を、毛利氏から織田信長に譲る事で講和が成立したのであった。

一日おいて、ここから秀吉軍が一斉に撤退を開始した。備中高松から播磨の姫路城まで、その長大な行程を、昼夜ぶっとおしで駆け抜けたのである。

二日後には姫路城に入り、出陣の用意と金銀、兵糧を集めさせた。新たに兵を雇い入れ、軍備を整え急ぎ出陣。その三日後には尼崎に

なんと四万の軍勢を集結させたのであった。
世に名高い、羽柴秀吉の七日間〝中国大返し〟であった。
同時に秀吉は、織田信長の四男で自分の養子になっている秀勝を押し立て、丹羽長秀を味方に付けた。
そして織田信長三男、神戸信孝を大将格に据え、明智光秀の寄騎だった池田恒興、堀秀政、中川清秀、高山右近を寝返らせ、その軍勢五万に膨れ上がった。
羽柴秀吉上洛を聞いて光秀は耳を疑った。
秀吉が戻って来るのは、せいぜい一ヵ月後位だと思っていたのだ。
神戸信孝や丹羽長秀が、秀吉の采配に従うとはとても信じられなかった。
「何処までも狡猾な奴」
光秀に闘志が湧いてきた。
秀吉は摂津、山崎に兵を進めていた。
腹心、斉藤利三が、
「勝龍寺城を獲りましょう」
と進言。
細川藤孝の旧城を本拠にする利三の案に光秀も同意し、そこを攻

め獲り布陣した。

「天王山を目指しましょう」

再び利三の提案を受けて、それに向かったが、遅かった。一足先に、秀吉に付いた中川清秀によって、天王山はすでに奪われていた。

両軍は山崎にて対峙し、決戦の時を迎えた。

羽柴秀吉軍五万、明智光秀軍は一万五千。勝敗は明らかであった。

季節としては梅雨の終り頃であった。雨が止むのを待って戦闘が開始された。

秀吉軍右翼は池田恒興隊、加藤光泰隊。中央に高山右近隊、堀秀政隊。左翼は羽柴秀長隊。山上、天王山には羽柴秀吉隊、中川清秀隊、他面々、これら軍勢が一斉に攻め込んでいった。

迎え撃つ明智光秀軍も、多勢に無勢ながら勇敢に突進し奮戦した。

「あの筑前、これ程機略に長けた男であったか」

次々に届く、味方の武将討ち死にの伝令を聞きながら、光秀は呟いた。

斉藤利三が足早に近づいて来た。

「無念ながら我が軍敗色濃し、ここはそれがしが押し止めますれば、お館様には溝尾庄兵衛殿と勝龍寺にお退き下され」

「其の方を見殺しにはできぬ」
「あいや、時がござらぬ。一刻も早くお立ち退きを」
渋る光秀に、
「それがしもすぐ後を追いますれば」
利三の申し出を受け入れて、光秀は家老溝尾庄兵衛茂朝と護衛の兵を連れて陣を離れた。
斉藤内蔵助利三は、ここが死に場所と覚悟を決め、秀吉軍の中に突進していった。
安土城にあって左馬助秀満は、光秀が山崎合戦に敗れ、敗走したとの報せを受けた。
「斉藤利三殿、討ち死にされたか。お館様は坂本城にて最後の決戦をされるであろう。一刻も早くこの城を退いて、坂本に向かうべし」
秀満は撤退の指示を出した。
戦に於いて城を引き払う時、敵の行く手を阻む為、城に火を放つのは戦国の常であった。
しかし光秀の言葉に従い、秀満は無傷のまま安土城を後にした。
すぐ間近まで敵兵が迫っていると伝令が入った。

「いずれの軍勢であるか」
「は、伊勢の北畠信雄殿の軍勢にござります」
「うむ、敵に後ろを見せるは末代の恥辱なれど、今はお館様のもとに急がねばならぬ。合戦は避けて参る」
北畠信雄軍の衝突を避け、大きく迂回して、秀満は安土を離れた。
信長の次男北畠信雄は左馬助秀満の兵を追撃せず、そのまま安土城に入った。
ここから奇怪なことが起こった。
北畠信雄の伊勢軍本隊は、信長の下命で神戸信孝と丹羽長秀の四国討伐軍に援軍として召集され、信雄のもとには二千しかいなかった。
本能寺の変を知り、右往左往しながら、安土に来たのであった。
「明智光秀は智将である。これだけの兵の数で敵を防ぐことはできぬ」
この時まだ信雄は山崎合戦を知らなかったのである。
「いずれ明智光秀は、この城を本拠として天下取りの覇を競うであろう。父の残したる名城を光秀ふぜいに渡してなろうか。火を掛けよ、焼き尽くせ、この城を灰燼に帰して、光秀を困らせよ」

狂気の沙汰であった。敵兵の姿も無く、またこの後一戦も交えることなく、父信長が心魂傾けて築いた天下無双の殿舎に火を掛けて焦土としたのであった。

この後信雄は、

「伊勢に戻りて策を練らん」

と領国にさっさと引き上げていった。

これにより北畠信雄は愚将の名を後世にまで残したのである。

坂本城に向かう秀満は、後方に上る火の手を見て愕然とした。

安土城の天守閣が燃えている。

「愚かな、なぜだ」

無血で明け渡したのが無駄になり、口惜しさが身体中に湧き上がった。

「愚かなり北畠信雄」

秀満は怒りを抑え切れず叫んだ。

黒煙と火炎が天を焦がし、琵琶の大湖に紅蓮の安土城が映り、妖しく揺れていた。

左馬助秀満は坂本城を目指す途中、秀吉の先鋒隊、堀秀政の兵と遭遇した。小競り合いが始まり、秀満は先を急ぐ為、単身琵琶湖を

愛馬、大鹿毛に騎して、湖水渡りをして坂本城を目指した。
騎馬一体となり、孤影を引きながら、湖水を渡る秀満に、堀秀政隊の兵士も刀槍を引いてその見事さを称えた。
有名な明智左馬助秀満〝騎馬湖水渡り〟である。

勝龍寺城に落ちた光秀は、最早己の運命が尽きた事を悟っていた。
「内蔵助利三は見事な最期であった」
側に座る溝尾庄兵衛に語った。
年老いてはいるが、庄兵衛は戦国武士らしく落ち着いている。
「事ここに至り、皆に済まぬと思うが今更悔いても詮方なし」
「お館様、まだ武運尽きてはおりませぬ。坂本城には左馬助殿も戻っておりましょう」
「坂本に戻るか」
光秀は力無く呟いた。
闇夜に紛れて光秀は溝尾庄兵衛ら近臣十人と共に城を抜け出した。
馬を疾駆させて間道を抜け、伏見を過ぎ、山科小栗栖に差し掛かった時、待ち伏せがいた。
落人狩りの服部党と呼ばれる土豪たちであった。

一説には、光秀は農民一揆の竹槍に刺されたとあるが、そうではない。

いきなり馬下から槍を脇腹に突き立てられ、激痛の中、鞭をくれ先を走った。

同じく胸を突かれた溝尾庄兵衛が、

「わしはお館様を追う、其の方らはここで食い止めよ」

苦しい息を吐いて味方の兵士に叫び、光秀を馬で追った。

暫く走った。やがて前方に落馬した光秀が地に倒れていた。抱き起こした庄兵衛を見て、光秀が苦しい息の中から、

「これまでだ、腹を切る。介錯せよ」

と庄兵衛に命を下した。

この後、光秀は血に染まる身体を起こし、切腹の為、座り直した。

「我が首は坂本の熙子のもとに届けよ。亡骸は人目につかぬ場所に隠せ」

「全て承り候」

庄兵衛は力強く答えた。

「熙子に伝えよ。わしは先に参るとな」

光秀は目を閉じた、心は落ち着いていた。

――人間五十年、この身は五年も長く生きた。

光秀の脳裏に同じように主家を滅ぼした、斉藤道三や松永弾正の顔が浮かんだ。

――道三公、弾正殿、この光秀もそちらに参る。

惟任明智日向守光秀、五十五歳。

本能寺より十一日間の天下であった。

介錯した家老、溝尾庄兵衛は悲嘆に暮れる間もなく、光秀の亡骸を竹藪の奥にひっそりと隠し、土をできるだけ掛けた。時が無い。己も深手である事を知っている。光秀の首を鞍覆いに包んで馬に跨り先を急いだ。

息が切れ、目も虚ろになってきた。突然、馬前に人影、驚いた馬が跳ね上がり、庄兵衛はもんどり打って落馬した。

人が近づいた気配に、ようやく半身起こし宙を睨んだ。覚悟を決め、

「敵か」

と叫んだ。

「御家老様」

と男の声が響いた。間があって、
「溝尾庄兵衛様ですね」
と声を掛けられ、
「何奴」
「怪しい者ではありませぬ。穴太衆石切千四郎めにございます」
暫く様子を伺い、庄兵衛が、
「おお、穴太の、や、千四郎か、何故この場に」
「お館様のご様子が気がかりで、坂本城の近くまで来ておりました。
あ、深手を負われましたか」
「いや、大事無い、と言いたいがもう目が利かぬ。其の方一人か」
「はい、一人です」
庄兵衛の顔が引き攣った。痛みが走り、血に染まった手で傷口を押さえた。
「これまでじゃな」
庄兵衛は千四郎の方に目をやり、
「お館様に目を掛けられし千四郎、恩を忘れてはいまいな」
「大恩あるお館様。なんぞ忘れましょうや」
「よくぞ申した。千四郎、頼みがある。わしは足も動かぬ。ここに

お館様の御首（みしるし）がある。これを坂本城御正室様に届けてくれ、敵に渡してはならぬ」

「お館様、明智様の御首（みしるし）ですか」

千四郎は驚いた。まさか首がここに、全身が震えてきた。

「千四郎……お前は武士ではないが、介錯はできるか」

「はい、石工は武人に非ず。しかし作法は心得ております」

「おお、頼もしいぞ。よし、わしは腹を切る。後を頼むぞ。あの馬を使って坂本まで走れ。無事お館様の御首、届けてくれい……奥方様には、お館様は先に参ると申されたと伝えてくれい……頼むぞ千四郎」

溝尾庄兵衛は座り直し、武士らしく見事に切腹した。

石切千四郎は勇気を振り絞り、作法通り介錯をしたのであった。

坂本城、大広間に正室熙子が座り、側に明智左馬助秀満がいた。

ちなみに、光秀の嫡男十兵衛光慶と、次男十次郎は二人とも先年病を得て、短い生涯を終えていた。

中央に光秀の首が置かれていた。

「石切千四郎、よくぞ届けてくれた。家老溝尾庄兵衛茂朝殿の最期

の言葉、確かに承った」
秀満が目を真っ赤にして千四郎に声を掛けた。周りの家臣たちは声を上げて泣いている。
千四郎は無言で頭を下げた。
熙子が口を開いた。
「石切千四郎、礼を申します。そなたもお館様に良く尽くしてくれました。この城は間もなく落ちるでしょう。早く穴太村に戻るのです」
秀満が千四郎の側に寄り、
「これは奥方様のお気持ちである。見事であった千四郎」
と直に金子の入った袋を手渡した。千四郎も泣いていた。
「千四郎、いずれ安土に参るか」
秀満が優しく語り掛けた。
「はい、あの城、見届けに参ります」
「行っても無駄だ千四郎」
「なぜでございます」
「北畠信雄が入城した後、城に火を放って退去した」
「火を」

千四郎が顔を上げ秀満を見た。

「誠にござりますか」

「誠だ。世間にはこのわしが火を掛けたと言う者もおろう。だが、断じてわしでは無い。あの北畠信雄が何を血迷うたか、火を放って安土城を焼いてしまったのだ。愚かなり信雄」

千四郎は声も無かった。

「お館様は先日安土城を去る時、このわしに、この城断じて焼いてはならぬと申し付けられた。悲しいぞ千四郎」

秀満の言葉に千四郎は胸中、

――なんという事だ、敵の姿も無いあの城を戦もせずにただ焼いて逃げるとは、なんという愚行か。

千四郎は力なく立ち上がった。悄然として坂本城を辞したのであった。

一人静かに光秀の正室熙子は座っていた。

心は嫁いだ娘の事を思っていた。

長女は再嫁して夫左馬助秀満と共にこの城内にいる。津田信澄、細川忠興に嫁いだ二人の娘、逆臣の娘としてどう生きていくのか。

またどういう死を選ぶのか。武門に生まれし悲しい運命（さだめ）、だが明智光秀の娘として、父の名を汚す事はないであろう。そう自分の心に言い聞かせた。

昨夜、千四郎が夫光秀の御首を届けに城に駆け込んだ時、熙子は気丈に振舞っていた。

秀満が御首を受け取ったあと、熙子は自らの手で夫の首を洗い、髪を結い直し、上を少し向かせて静かに置き、手を合わせ冥福を祈ったのである。

「殿、熙子もお側に参ります」

懐剣を手に取り、静かに目を閉じ、息を整え勢いよく我が身に突き立てた。

左馬助秀満は熙子の自害を見届けた後、最後まで付いて来た家臣たちを労った。城を最期とする者だけを残し、下働きの男女たちに金子を与え城から逃がしてやった。

やがて秀吉軍の先鋒、堀秀政隊が坂本城を包囲した。

秀満は明智光秀愛用の国行の太刀、吉光の脇差、虚堂（きどう）の墨蹟などを堀家の家老堀直政に届けさせた。戦火で失う事を惜しんだのであった。

堀直政はいたく感銘を受け、使者に、

「間違いなく預かり申した」

と答えた。

「されど世に名高い惟任殿御愛用の、郷義弘の脇差が目録に無いが、これはいかがされたか」

と尋ね、返事を待った。

秀満からの返事が届いた。

「名刀義弘の脇差は、この秀満が身に付け、あの世にて主君光秀様に直にお渡しするものなり」

と答えたという。

左馬助秀満は城が落ちる時、妻の自害を見届け、天守閣に火を掛け、切腹して果てたのであった。

織田信長と同じく遺骸は見付からなかった。

戦乱は収まり、羽柴秀吉ら織田信長の重臣たちが、織田家の跡目と領地分配を決める為、清洲会議が行われようとしている頃。

安土城の天守閣があった琵琶湖のほとりで、焼け崩れた城郭、本丸跡を遠目に眺める千四郎の姿があった。

――また、石垣だけが残った。織田信長様も明智光秀様も、この城には相応しくなかったのだろうか。城主一代でこの城の命は全うした。後世に残ることを拒絶したのだ。我ら穴太衆はこの後まだ城を築かねばならぬのか、後世に残る城とは一体どのようなものか。

千四郎は首を振って、琵琶湖の先、遠く霞む坂本の方を見つめていた。

第二話　完